

古代日韓関係の成立

—地域間の交流から古代国家の関係へ—

濱田耕策

はじめに

第1章 考古学の成果から見る「半島・海峡・列島」の地域間交流

- (1) 弥生時代と無文土器時代の年代論
- (2) 土器の交流
- (3) 金属器の交流
- (4) 住居の交流

第2章 文献・文字史料から見る古代日韓の地域間交流

第1節 BC1世紀～AD1世紀の日韓の地域間交流

- (1) 中国文献から見る日韓の地域間交流
- (2) 韓国文献から見る日韓の地域間交流

第2節 AD2～3世紀の日韓関係

- (1) 中国文献から見る日韓関係
- (2) 韓国文献から見る日韓関係

おわりに

(要旨)

報告者はこれまで文献研究を中心として、4世紀から9世紀までの範囲で、日韓の関係史を研究してきた。その関係史は、高句麗、百済と倭国、新羅と日本の外交交渉に視点をおいた関係史であった。そこでは王権の発動による両者の外交の展開とその根底にある自己認識の相対化を問題としていた。

しかし、ここでは、日韓関係史の対象の時代を大いに遡っている。それは律令法の体系を備えた古代国家が誕生する遙かに以前の朝鮮半島と日本列島という広地域の交流と関係であることをまず念頭に置いている。古代の日韓関係史と言え、ややもすれば、近代の国家間の関係の古代史版と誤解されかねない危惧があるからである。そうではなく、この時代の両地域の関係は「多地域間の交流」あるいは「多地域間の交渉」という視角から考察することが正当であろう。

本報告の基調には、半島と列島の地域間が地理的に極めて近距離であることの実感と確認がある。

両地域を隔てている海峡には島々が連鎖している。海峡に浮かぶこの島々がこの両地域を結んでいるのである。今日、乗船してこの海峡を渡ったり、航空機内から海峡を下に望むときには、まさにこのことを実感するのである。

そこで、第1章では、列島の主として西部地域の弥生時代とこれに並行する半島中南部地域の無文土器時代の土器と金属器(貨幣、青銅器、銅鏡、鉄器)と住居を中心に、両地域間の人の往来と定着の実態を日韓の代表的な遺跡調査と研究とによって紹介している。

第2章では、遺物と遺跡から実感される両地域間の交流を担う人々の往来の可能性とその背景を中国と韓国の文献を中心に、文献批判を踏まえて紹介している。

そこでは、BC1世紀からAD3世紀までを二つの節に分かっている。その分節はあくまで便宜的である。ただ、両地域間の交流と関係は長い前時代のそれを継続しながらも、交流をより盛んにして、かつ政治課題が次第に含まれて行くことの根底には、BC108年に半島の北部地域に漢帝国が4郡を配置して、このなかの楽浪郡は3世紀初にはその南部を分割して設置された帯方郡とともに4世紀初(313年と帯方郡は314年)まで存続したことがある。

この2郡が400余年間(帯方郡では約100年間)存続し、中国王朝の政治的かつ文化的な影響を両地域に与え、また両地域が主体的にそれを求めたことは半島と列島の両地域間の交流と古代国家形成過程での関係史を理解する時には軽視されてはならない。

この第2章で扱う時代では、日韓の両地域間の交流と関係を結び、かつそれを堅くする存在が中国王朝であり、またかの2郡であることは軽視できない。両地域の諸地域の勢力がこれと関係することがまた日韓の諸地域の勢力の交流と関係を深化させた側面も理解されて来よう。

(キーワード)

無文土器、弥生土器、海村、三国志、三国史記

はじめに

日韓の歴史共同研究において期待される成果とは何か。歴史研究者は歴史を多様な史観から解釈しこれを公表するが、歴史認識を一つに絞り、他を排除することには反対するものであって、史実を科学的に発掘し、歴史的脈絡のなかにおいてこの史実を解釈することに最大の努力を行う。このことこそ歴史研究者の使命であり、また喜びと満足を得るものであって、延いては社会的貢献であると考えている。

歴史を考える視点は社会的諸条件の下に生きる現代人が知の営為として生成するものであるが、歴史を考える価値観の形成は近代から現代に至る国家と社会の歴史がこれを規定する側面のあることは否定できない。しかし、歴史研究者はそこから自由であることも心掛けている。

そこで、歴史研究者を取りまくさまざまな条件を超えて行なう国際的な歴史共同研究、しかも、地理的に隣接する相互間の関係史を共同して研究するということは、史実の発掘と検証作業の過程のなかで、多

様な価値観に立つ相互の観点を対照しつつ、相互間の関係史に直面するならば共同研究は成果を得られるものとする。そこには近代から現代に至る関係史から生まれた歴史認識が投影されては、ここに担当する古代の関係史の理解に歪みをもたらすであろうし、その経験も既に明らかにされている。

ところで、日韓の歴史、なかでも関係史は日韓の二国間の関係のみで進行した関係ばかりではないことは明らかである。各々の内的外的な諸条件の対応関係のなかで関係史は進行し、次代にまでその影響を濃く残した歴史である。このことを等閑視し、一国主体の史観に陥っては生命力のある共同研究の成果は得られないであろう。日韓関係史の研究は世界史的条件と日韓のそれぞれの内的条件との相互性という複眼的な検討のなかでこそ豊にその歴史を展望することができると思う。

さて、私が担当する「古代の日韓」という時空間における関係史の検討は、国民国家の枠組みから視点を定めることは必ずしも適切ではないことに思い至る。「日韓」という今日の国家名を並べる他には適切な時空間を表す言葉は見当たらないようであるが、「日韓」の語を便宜に使わざるを得ないところにもこの地域の歴史を見る視角の今日的な限界が現れていよう。「日本列島と朝鮮(韓)半島の地域」の定義にも国民国家の視点からは必ずしも自由ではなさそうである。「列島と半島」の「諸地域」の視角からこの時空間における交流と関係の歴史を構成することが試みられてもよく、私の担当する4世紀までの時代はまさにそれである。

何故ならば、「日韓関係史」とは日本国と韓国という相互に国民国家の他者からの視点に立って構成される歴史であるが、統一的な国家が成立する以前のこの「列島と半島」の広域では、この「日韓」の関係は未だ誕生していないと見なければならぬ。「日本国」と「韓国」などと二者に区分してこの広域の関係史を説明することは寧ろナンセンスであって、列島と半島には多くの「地域」とその歴史があるのであり、「日本国」と「韓国」は未だ誕生しておらず、それは氏族共同体を単位とし、かつ自然的条件に多く規定された複数の地域が構成する社会である。

しかも、この社会は必ずしも特定の地域に固定してはいない。長い時間のスパンでこれをみれば移動が盛んである。この移動はただ半島から列島へのベクトルは強いながらも、その前段階には、半島の北部、さらにはアジア大陸東部からの波状的な移動が半島諸地域の移動を惹起し、かつ促進することも忘れてはならない。

それ故に、この連鎖する移動は蓄積された各段階の文化を刺激し、文化の緩やかな発達を促進しよう。文化は固定的であるよりは、交流することで生命を持って成長することがこの広域の人間文化からも認められよう。

ところで、この悠久の古代の歴史のなかでも、隣接する近代国家のそれぞれの歴史からその関係史を見ようとする時、ややもすれば「歴史の純化」に陥る危険が潜んでいる。優劣と先後と強弱を競うが如き陥穽に落ち込む危険である。この陥穽は過去のものばかりでないことも明らかである。

列島では紀元前に遡る弥生時代から紀元後の古墳時代まで、半島では無文土器時代から三韓・三国時代と言う時代範囲では、両地域に氏族の移動と定着による氏族の集合から、数十から百近い初期の国家(『漢書』等に見る「国」の記録)への展開が見られる。この初期の国家がさらに連合或いは争いの後に統合を経て「大王」を戴き、その後、中国王朝との通交の蓄積のなかで、律令を体制化した古代国家に成長するが、この過程の歴史を国民国家の視点に立って「日韓の関係史」として理解することには躊躇

躊躇と疑問を覚えざるを得ない。

むしろ、「日韓関係史」の実際にあるのは「地域間」の交流の歴史である。日韓の古代国家が成立する過程のなかにこの「地域間の交流」を照射し、その意義を「古代国家の形成史」のなかに考察することこそ課題であることに気付かれるのである。

パトリック・J・ギアリ著『The Myth of Nations; The Medieval Origins Europe』の邦訳『ネイションという神話—ヨーロッパ諸国家の中世的起源—』（鈴木道也・小川知幸・長谷川伸之訳、白水社、2008年6月）のなかで、多数の例があげられて説かれるように、古代の言語や文化は極めて流動的であり、そこには不変の領域が確定しているわけではない。それ故に民族も均一ではない。また、国民国家に固有の先祖や領域が存在しないことも強調されている。

このことは私が担当する「古代日韓関係の成立」の時代を理解するにおいても十分に妥当するギアリの示唆である。「地域間の交流から古代国家の関係へ」と副題を付したのは以上の視角からである。

一方、西洋史家の故阿部謹也氏は『北の街にて—ある歴史家の原点—』（洋泉社、2006年8月初版、初版は1995年に講談社刊行）のなかで、「アカデミズムの中にいる研究者にはある構えがあり、その構えの背後には国家がはっきりと姿を現している。研究者としては個人なのであるが、その個人がアカデミズムの課題の中では国家と融合しているのである」と述懐まじりに歴史研究者のある姿勢を指摘している。国際的な共同研究、とりわけ隣接する相互間の関係史を研究対象とする場面では自覚したい阿部氏の指摘である。

以上の立場から、第1部では古代の律令国家の成立以前の半島地域と列島地域、さらにアジア大陸東部にわたる広地域の「歴史」を「神話と伝承」に昇華された「王権の神の物語」や「創作された歴史」或いは「歴史の発明」という現代が創作した古代史から離れて、この「地域」の文化遺産と文献批判から獲得される地域間の「交流」をこれまでの研究成果によって整理する基礎の作業を進める。

第1章 考古学の成果から見る「半島・海峡・列島」の地域間交流

【基本的な視点】

朝鮮半島と日本列島を跨ぐ広「地域間」における2～1万年前にまで遡る悠久な太古の時代には「日」「韓」という他者に二分した条件での相互認識は生まれていないと考える。すると、この時代の「日」「韓」の交流史とは果たして、今日的に考察する思考の枠組みのなかで整理することは可能であろうか。

交流とは少なくとも二者或いはそれ以上の帰属意識で結ばれた集団があつてこそ生ずる政治、経済、文化に表れた諸活動とその成果に向けられた理解である。ここに古代の「日」「韓」の関係を今日の歴史学の問題意識から考察する視野のなかでは、その対象は確たる時代では早くとも4世紀前半からの大和政権の成立以後の諸豪族の連合で運営される古代国家の一段階の時代であり、広域の土地と豪族に指導される人々の経済活動のうえに成立するある程度の統一的な統治制度を準備した、今日からみれば初期の国家以後である。

今少しく前述の視覚から「日」「韓」関係史の対象を遡っても、日本列島では邪馬台国をはじめとした多数の小国が諸利益の対立のなかで連合とともに統合への熾烈な存在をかけた時代、また朝鮮半島では邪馬台国と同じく『三国志』東夷伝に記録された3世紀半ば以降の三韓時代の諸小国家以降からであろうと、ここでは理解する。

この時代に至るまで、朝鮮半島では北部地域では中国の戦国時代の東北部に燕国に接する「朝鮮」の勢力があり(朝鮮史上では「古朝鮮」と時代区分されるが、これまでその頂点の箕子や衛満の出身が語られるが、広い「古朝鮮」の社会と政治の構造が解明されているとは言えず、考古学の知見からは統一的な「古朝鮮」の国家構造は表れておらず、そこに見ることができるのは各地域の社会、文化の構造である。)、やがてBC108年に前漢の武帝の遠征を受けてこの「古朝鮮」の支配体制(この頃では部族長を媒介とした緩やかで、或いは強権的な支配構造の面が強い)が崩壊して、その故地に楽浪郡、真蕃郡、臨屯郡、さらに翌BC107には玄菟郡と言う計4つの郡とその管下に10数の県が設置されたが、この四郡を通して前漢から西晋までに中国の中央集権的統治のもとで、その政治的かつ文化的な影響を受けることになる。

「古朝鮮」と四郡に接して、半島の北部では高句麗族の統合が国家の支配体制を備え、南部地域では馬韓と辰韓と弁韓と大きく分類される三韓のなかで、多数の小国家が地政学的条件から郡県の政治規制と文化を受けつつ、統合への緊張のなかにあった時代に古代「日」「韓」関係の歴史学的考察は向けられよう。

このように考える筆者は、その時代に先行する悠久の時代に半島と列島地域と言う広域には、人々の往来はその回数の多寡は計測不能であるが、また、海流の制約を克服する航海術の発達に規制されながらも双方向の往来が試みられ、また継続したことは両地域の遺跡と遺物の研究から知られている。その往来は此方からみれば渡来であり、彼方から見れば“渡航”であるが、そのことは今日的視角から「日」「韓」などと二者に分かった上での関係の歴史として理解しようとする姿勢は正当ではなかろう。「日」「韓」の古代国家の交流関係が誕生する揺籃期であり、地域間の交流なのであり、アジア大陸から俯瞰すれば「日」「韓」の地域を超えた広地域内の交流とも見ることができよう。

そこで、私の視角から、日本の歴史学の時代区分である弥生時代、韓国では無文土器時代から「日」「韓」両地域の交流を遺跡と遺物に向けられた考古学の成果を紹介することとする。

この時代に先行する旧石器時代の文化は半島地域では東北部の咸鏡北道雄基郡の屈浦里遺跡から西南部の忠清南道公州市の石壮里遺跡など100を越える遺跡が知られており、列島地域では群馬県の岩宿遺跡の発掘以来、各地の遺跡から旧石器時代は確認されている。地質学では新生代第四紀更新世に相当し、その下限は、一万余年以前と言われるが、この時代では半島と列島の間は陸続きか、そうでなければ、海峡は極めて狭いことでもあり、「交流」と言う固定した地域間の人の往来であるよりは寧ろ「移動」という人間の基本的な生態であろう。

つづく新石器時代は土器を指標として半島地域では櫛目文土器時代、列島地域では縄文時代に相当する。その上限はヴェルム氷期の終わる12000年前の頃、下限はBC1000年頃の間で区分される。半島地域では西北の黄海北道鳳山郡の智塔里遺跡から東南の慶尚南道釜山広域市影島区の東三洞遺跡などの多数の遺跡が知られ、また、列島地域では千葉市の加曽利貝塚など各地にこの時代の文化が

確認されている。

この悠久の時代には半島地域で作製された結合式釣針が福岡平野地域から出土しており、一方、列島西部地域の佐賀県有田町の腰岳から採取される黒曜石が半島地域に渡っていたことが知られ、また半島地域の孔列文土器(土器の口縁に孔を土器の内から、或いは外から穿たれ、廻らされている)が列島西部地域に渡っている相互の文化往来のことが知られる。(片岡宏二2006)

ここまでの時代とその文化は前述したように今日的な問題意識の視点から「日」「韓」と言う彼我の両者に分かった関係史の研究視角に立って考察するならばその文化を担った人々の実相を見誤るであろう。巨視的にみて、原初的にも共通の文化をもっており、前述した古代国家の誕生を準備する広域の基層社会とその原初の文化が長い時間をかけて形成される時代と理解したい。

こう考える筆者は、近代以降の国民国家の重要な指標の一つである領土の視角から、また、近代以来の「日本と韓国」との諸関係、なかでも「日韓併合」の歴史から生まれた政治、文化の交渉史の視点を無意識のうちにこの悠久の時代までにも遡及させ、この宏遠な時代を理解するならば、その考察の結果はかなり乱暴な歴史像となろう。考古学の分野から生み出されたこの時代の文化を無意識のなかで今日的に国民や国境の意識から理解することがあるならば、そのことは歴史の実相からは遊離した今日的な作られた歴史像に陥るであろうことを自戒しなければならないであろう。

(1) 弥生時代と無文土器時代の年代論

そこで、文献を中心としてこれを解釈する歴史学の成果と地下に埋もれた人間の社会生活の段階的発達の証である埋蔵文化財に向けられた個別と総合の考察によって分析する考古学の成果との応用の考察が可能な時代、即ち、半島地域では無文土器時代、列島地域では弥生時代に相当するおよそ紀元前10世紀頃からのこの両「地域」間の人の交流を埋蔵文化財と文献の考察から獲得される成果を整理しよう。

ところが、ここで「紀元前10世紀頃」と記したが、別表【表 I 参照】に見るように、列島地域の時代区分である弥生時代の開始時期については、2002年以来の国立歴史民俗博物館・歴史学術創成研究グループが行った炭素14年代測定法による成果では、従来の弥生時代の開始についての年代観が500年ほど遡ってこの「紀元前10世紀頃」と結論づけた仮説が提起されている。(国立歴史民俗博物館2007)

この別表を作成した藤尾慎一郎氏とともに研究グループを運営した春成秀爾氏は「弥生早期の始まりが前10世紀後半、前期が前9～8世紀、中期が前4世紀に始まるとする炭素14年代は、考古学的に点検しても成り立つ」と説明する(春成2006、86頁)。

春成氏はより具体的には「北部九州の縄文晩期黒川〔濱田の註:鹿児島県日置郡吹上町永吉砂走黒川〕式古段階は前1300～1000年頃、黒川式新段階は前1000～950年頃、弥生早期の山の寺〔同註:長崎県南島原市深江町〕式・夜臼〔同註:福岡県糟屋郡新宮町ゆうす〕I式は前950年頃、夜臼IIa式は前840年、弥生前期の板付〔同註:福岡市博多区〕I式は前780年がそれぞれの上限である」こと、これに対応して半島地域の炭素年代のおおよそは「無文土器早期の羨沙里〔濱田の註:京畿道河南市〕式は前13～12世紀、前期の可楽洞〔同註:ソウル特別市松坡区〕式は前12～11世紀、欣岩里〔同註:京畿道驪州郡占東面〕式は前11～10世紀、中期の休岩里〔同註:忠清南道瑞山市海美面〕式は前10～9世紀、松

菊里〔同註：忠清南道扶餘郡草村面〕式は前8～7世紀であると説き、「炭素年代でも、黒川式－可楽洞式・欣岩里式、山の寺式・夜白Ⅰ式－休岩里式、板付Ⅰ式－松菊里式は、ほぼ併行関係にある」と説いて、両地域間の土器文化の併行関係を説明している(春成2007、21頁)。

この新しい弥生年代の年代観は現下に検討盛んな課題である。その測定材料を甕に付着した炭化物であることに対して、人骨や鹿骨による測定結果からこの仮説を批判・検証する成果も提出されており(田中良之・溝口孝司・岩永省三・Tom Hjhman2004。岩永2005、2005～2009)、今日では考古学の研究姿勢への問い掛けとともに関係の学界では盛んに再検証と仮説の強化が進められており、また社会の関心をも集めている。

そこで、文献とこれを解釈する歴史学の成果と埋蔵文化財の歴史学的研究との対照が可能な時代、即ち、半島地域では『韓国考古学辞典』(韓国文化財研究所、2001年12月)によれば無文土器時代(青銅器時代)、列島地域ではこの時代に相当する縄文時代晩期から弥生時代の開始期に相当するおよそ紀元前10世紀頃からの両「地域」間の交流を文化遺産と文献批判から読み取られた考察の成果から整理しよう。

この学知の構築と言う意欲から多いに刺激的なこの時代の半島地域と列島地域の文化交流の確認は遺跡から出土する土器、金属器のみならず、遺跡そのものの住居址、墳墓の形態等の考古資料がどのように併行するかと言う関係の構成に波及する。そのことは両地域間を往来し、また移住してやがて混合かつ融合した人々が古代国家の段階的発展毎の日韓関係の前史を構成した歴史の諸側面の理解にも及んで来よう。

(2) 土器の交流

【列島地域出土の無文土器】

半島地域における青銅器の使用はその後の鉄器の使用とも重なるが、この時代の指標となる土器文化の形態は無文土器であることから、今日では広く無文土器時代とも名づけられる。それまでの櫛目文に代表される土器の幾何学的な紋様はほとんど消滅して、平底と無文を特徴とする。粗く製作された壺、甕、鉢等の土器、丹塗かつ研磨の土器、後には黒色かつ研磨の土器を特色とする。

武末純一氏の整理によれば(武末純一2002)、無文土器は南北約1,150km(島嶼部を含む)、東西約360kmの半島では地域と時代によって様々に変化する。早期(刻目の突帯文土器を主体とする漢沙里式土器)、前期(口縁に粘土帯を廻らし、その下端に刻目をいれる可楽洞式がこの期の先行型)、孔列を施した孔列土器の欣岩里式に区分される)、中期(休岩里式、松菊里式)、後期(水石里〔京畿道漢金市〕式、勒島〔慶尚道四川市〕式)に時期区分されるなかで【表Ⅱ参照】、武末は九州北部地域と交流する朝鮮半島南部の土器については甕を基準として前期は欣岩里式(口縁の直下に小さな孔〔あな〕をめぐる孔列文甕)、中期の松菊里式(外反する口縁の甕)、後期の前半は水石里式(口縁の断面が円形、かつ粘土紐貼付の二重口縁土器)とその後半の勒島式(口縁部に断面が三角形の粘土帯を貼り付ける粘土帯土器)とする大別を提示される。

そこで、武末氏は列島西部地域との併行関係を考察して、無文土器早期は黒川式(鹿児島県日置郡吹上町永吉砂走黒川洞穴出土土器)よりも早く、「前期は黒川式～刻目突帯文期(縄文晩期～弥生早

期)、中期が刻目突帯文期～板付(福岡市博多区)Ⅰ式期(弥生早期～前期初)、後期は板付Ⅱ式期～須玖(福岡県春日市)Ⅰ式期(弥生前期中ごろ～中期前半)にほぼ相当する」との結果を導出し、半島と列島両地域の文化の時代軸が対応する関係を提示されている。(武末純一2002、113～114頁)

さて、無文土器時代における列島西部地域と半島南部地域との交流を土器の面から解釈するには、片岡宏二氏の精力的な整理(片岡1999)が有益である。片岡氏は中国地方の島根県、広島県から鹿児島県までの列島西部地域において、「孔列土器」(前期の無文土器)を出土する遺跡を島根県松江市のタテチョウ遺跡から鹿児島県曾於郡志布志町の飛渡遺跡までの74ヶ所に発見かつ整理されている。(片岡1999、57～63頁)

そのなかで、「弥生時代前期末には朝鮮系無文土器の大量出土」をもたらす現象を認めて、その背景には渡来人の列島地域への移住があり、その契機は「箕子朝鮮が衛満朝鮮によって滅ぼされ、その一族が戦乱の地を逃れて南下したことを契機にその南下先でもさらに移住が促され、その波が日本にたどり着いたとする意見が強くなっている」ことを紹介する(片岡1999、51～52頁)。衛満朝鮮の開始はBC194年とされるが、前述したように近年に提起されている弥生時代の開始時代が500年余も遡るとすれば、箕子朝鮮と衛満朝鮮の交替はBC2世紀初と考えられるから、列島西部地域での「朝鮮系無文土器の大量出土」の原因説は再検討を求められることとなる。

半島南部地域の文化要素が列島西部地域に伝播する要因を種々に考察することは今後の課題として求められるが、半島と列島の両地域を包括する新しい考古学的編年と実年代との対応関係を設定するには、さらなる検討が継続的に求められる。

また、片岡氏は日本出土の松菊里型土器(口縁部が緩やかに外に向けて反る平底の土器)に類似する土器とその系統の土器は岐阜県可児市の北裏遺跡から四国地域から福岡県小郡市の津古土取遺跡までの19遺跡について、「朝鮮半島における中期無文土器である松菊里型土器がそのまま日本へもたらされたもの、あるいは渡来人が日本国内で作ったもの、さらには松菊里型土器の制作技術・器形の模倣など何らかの影響を受けたものである」と分類しており(75頁)、人々の移動と定着とその地における技術交流を確認している。

さらに、武末純一氏は無文土器時代後期前半の水石里式土器が列島の九州、中国、四国地域にもっとも多く発見され、佐賀県小城市三日月町の土生遺跡では壺、甕、高杯の弥生土器とも融合した事例を指摘し(武末1991、14頁)、片岡氏は後藤直氏が先に進めた研究を継承して、「後期前半」の朝鮮系無文土器を曲がり田遺跡(福岡県糸島郡二丈町)や福岡市博多区の諸岡遺跡、板付遺跡、また福岡県小郡市の横隈山遺跡、佐賀県小城市三日月町の土生遺跡のほか熊本以北から山口県までの23遺跡に確認し、かつ長崎県壱岐市の原の辻遺跡ほか、福岡、山口県にも9遺跡を確認している。(片岡宏二1999、95頁)この文化を支える人の住居については後述しよう。

また、武末氏は無文土器時代後半の靍島遺跡では「列島の弥生中期初頭～前半の城ノ越(福岡県中間市城ノ越〔じょうのこし〕貝塚)式土器や須玖(福岡県春日市須玖)Ⅰ式土器、あるいはその面影を残す土器がかなり出土している」ことから、そこに弥生土器が靍島へ搬入され「弥生土器と無文土器が渾然一体となったような土器」のあることを指摘している(武末1991、14頁)。

そこで、土器の交流を担う人の交流の実相を考察することになる。後藤直氏は「遺跡の外部から無文

土器人によってあるいは弥生人の手を経て持ち込まれたとみるべきである」(後藤直2006)、そして「諸岡遺跡の無文土器が弥生社会と一定の隔たりをもって存在するのに対し、土生遺跡では弥生集落のまっただ中に多くの無文土器と擬無文土器が存在している」(後藤、91頁)ことから「無文土器の担い手たちは弥生社会の中に入り、そこに生活の場をもち、弥生土器に近く変形した擬無文土器を作るに至ったと考えられ」、「北部九州出土の朝鮮系無文土器は、朝鮮南部の無文土器社会と弥生社会の交渉を担って往来した人びとが残したものであり、朝鮮南部で出土する弥生土器も同様であろう」とまとめる(92頁)が、彼らの来住の事情と目的、そして、彼らが弥生社会に生活を始めた事情は不明であると言う。(後藤、92頁)

この二つの特徴について解明をさらに発展させたのが片岡宏二氏の研究(片岡1999)である。「渡来人の集団が生活したと考えられる遺跡」の最初の発掘は1974年に調査された諸岡遺跡(福岡市博多区)であり、水石里式の無文土器の甕や住居址を確認されたことに認められるが、諸岡遺跡と土生遺跡の無文土器の出土状況の差を捉えて、両地区における渡来人の居住形態を次ぎのように整理する。

まず、遺跡における無文土器の出土の割合では弥生土器が多数なのであり、渡来人集落のみで完結する広い集落ではなく、「渡来人集落」とは「渡来人が居住する集落という理解にとどまり」、「伝統的な朝鮮半島の生活様式を保持して」おり、「弥生社会の中では特殊な存在であった」と限定している。

片岡氏の分析と整理に依れば、朝鮮系無文土器とこれが「弥生土器の影響を受けて変容した擬朝鮮系無文土器」を出土する遺跡では、玄界灘沿岸部に点在する遺跡では、擬朝鮮系無文土器は出土せず、朝鮮系無文土器も数個程度である反面、北部九州内陸部に集中する遺跡では朝鮮系無文土器と擬朝鮮系無文土器が多量かつ甕、壺、高坏など各器種を出土することから、前者では「小規模な交易や偶然の漂着によってもたらされた」のであり、後者では「何らかの理由で渡来して弥生社会の中に住み着いた渡来人の集団」と評価している。前後者の例は表Ⅲであるが、後者の代表的な諸岡遺跡のタイプは「渡来人集団は既存の弥生集落の一角に移住し、しかも限定された時間内に生活した後、再びいずこへか移動することが知られる」が、土生遺跡のタイプは諸岡遺跡タイプと同じく、「既存の弥生集落があつて、それに依存する形で渡来人が入ってきている」が、「渡来人居住期間は長時間で、他地に移動することなく、弥生人に同化する最後までその地に定着した」と区分している。(片岡1999、103～113頁)

【半島地域出土の弥生土器】

それでは、半島南部地域と列島西部地域との交流を証明する遺物として半島南部地域からでは出土した弥生土器がある。その早い事例は1934年に金海(金海市会峴洞)貝塚から出土した甕棺が注目された。近年では、1980年に慶尚南道泗川市の勒島遺跡から甕棺などの弥生土器が発掘されたことから(申1980)、弥生前期から中期に相当する無文土器時代の後期に相当する時代のこの海域の相互交流に一段と強い関心が集まっている。

片岡宏二氏は次に述べるように慶尚南道の南部地域の12遺跡から出土した弥生土器を整理する。①金海市池内洞遺跡からは西北九州の弥生土器に相似する土器が出土、②釜山市温泉洞遺跡からは「熊本県を中心とする中九州地方の特徴的な土器」が採集され、「半島南部社会が、中九州まで交渉領域を拡大していた」ことが知られる。③固城東外洞遺跡は「北部九州との関係」が注目されている。(片岡

1999)

1985年以来、釜山大学校博物館が調査した④勒島遺跡では、住居址11例、竪穴遺跡3例を検出する。(申1980)又、遺跡出土の土器について、安在皓・徐鈴男両氏(釜山大学校博物館1989)は勒島遺跡出土の土器を「弥生時代前期初頭城ノ越式期」と「弥生時代中期初頭、城ノ越式土器の遅い段階」と「須玖I式土器段階」の3段階に弥生土器との並行を理解されたことを片岡氏は紹介する(片岡1999、132頁)。

⑤釜山市福泉洞菜城遺跡では多数の弥生土器が出土し、これを調査した河仁秀氏(河1990)は出土土器が北部九州の弥生土器と形式や整面方法などに同一の特徴を持ち、無文土器人が弥生土器の影響を受けて作った無文土器が出土しない点を総合して、「菜城遺跡の弥生土器は無文土器人たちが弥生土器の影響を受け、自分で作成したとするよりも、当時菜城遺跡に居住した弥生人たちが、直接製作したとみるのが良いと思われる」と踏み込んで、列島地域からの渡航人の存在を見ている。

申敬澈氏と河仁秀氏は、菜城遺跡では「中期初頭城ノ越式土器から中期前半須玖I式にかけての土器」が同時期の出土土器中では94%も占めると言う特異性を示しており、勒島遺跡ではその比率が8%であることから、「勒島遺跡の弥生土器は搬入品と考え、菜城遺跡の弥生土器は交易あるいは対外交渉のために居住した弥生人たちの製作によるもの」であり、前者では長期間の列島地域との交渉が、後者では弥生人の短期の居住と弥生土器の製作があったと述べている。前述した列島西部地域での無文土器に見られた渡来人の居住と対照的な人の交流の動態を示している。

そこで、片岡氏は勒島遺跡や固城東外洞貝塚では「遺跡を営む主体者が航海民的な性格である」ことを想像しており、その長期的な接触の点から「北部九州と接触を持った航海民としての漁民の性格を示す」とも指摘する(片岡1999、130～148)。一方、菜城遺跡や金海貝塚や池内洞遺跡では弥生土器が生活道具や埋葬のための甕棺、祭祀土器など多種であることから「この地域に於ける日韓交渉の基本的なあり方として、直接的な渡来者の存在を裏付けるものである」と言う。

さらに、金海池内洞遺跡出土の祭祀用丹塗り磨研土器は壱岐・対馬・糸島地方に分布するものであり、伊都国による玄界灘を往来する海上交易が指摘されている。『三国志』魏書の倭人伝の記録にある「倭人」の住む「其の北岸は狗邪韓国」という海峡圏の相互交流が盛んとなる前夜の土器に現れた交流である。

【武末氏の“海村”説】

ここに至って、武末純一氏は「漁労だけでなく海上交易活動も主な生業とする集落を“海村”」と定義した。半島南部と九州西北部地域の間の人々の相互移動、即ち、相互の渡海があり、またその後に定着した事例もあろうが、或いは海峡を渡海航行して物資の相互交換を担う人々が居住する地域の生活相の個性を抽出している。(「茶戸里遺跡と日本」国立中央博物館『茶戸里遺蹟発掘成果と課題』2008年11月、293頁)

そこで、武末氏は半島南部地域における“海村”の要素を見せる昌原市の茶戸里遺跡の出土品から半島地域の原三国時代に対応する列島の弥生中期後半から弥生後期にわたる半島と列島の海峡域を渡る交流を紹介する。

武末氏によれば、海上交易の活動を主たる生業とする海村の典型例は九州西北部地域では福岡県

志摩町の御床松原(みとこまつばら)遺跡である。また、対馬や壱岐市の原の辻(はらのつじ)遺跡と同市のカラカミ遺跡であり、半島南部地域では泗川市勸島遺跡である。原の辻遺跡では渡来人等の往来する船着き場が発見されてもいる。

御床松原遺跡や勸島遺跡では“アワビオコシ”等の漁労具が多く、農耕社会であることを象徴する石包丁の農具が少ないことに「海村」の生活相がよく表れている。両地域内に限定すればかつて故岡崎敬氏が九州西北部の海浜地域に発見した「海人」の集落である。

この「海村」の「海人」が半島南部地域九州西北部と交流した生活相を伝える遺物が前述の土器であり、次に紹介する両地域の全くの外からもたらされた中国の銅銭等である。

【漢代の貨幣の出土】

“海村”の性格をよく表す遺物は半島と列島に共通して出土するこの地域外の文物である中国漢代の遺物であるが、そのなか貨幣は年代幅が絞れることから遺跡の実年代の総合的な判定に有効となる。

まず、半島地域では、李榮勳氏(李1991)と金京七氏の整理によれば(金2007)、BC2～1世紀から紀元前後では昌原市の茶戸里遺跡では五銖銭(前漢武帝の元狩4年[BC119]に直径1寸[2.6cm]重さ五銖[3.25g]の円形方孔銭)が3点、昌原市の城山貝塚では同1点、勸島では同1点と半兩銭(秦の半兩銭は12銖[8g]、漢代の半兩銭は高后[BC186]の半兩は八銖[5.3g]、武帝の半兩銭はBC120の2.7g、半兩と陽鑄した円形方孔銭)4点、永川市古鏡面の龍田里では五銖銭3点が出土すると整理されている。

一方、列島地域では、高倉洋彰氏(高倉1991)や岡部裕俊・比佐陽一郎・片多雅樹氏が2004年8月の段階で進めた整理(岡部ほか2004)によれば、御床松原遺跡では貨泉3点、半兩銭1点が、新町遺跡(福岡県糸島郡志摩町)では貨泉1点、半兩銭1点、近隣の前原市上籬子遺跡と同市の三坂七尾遺跡ではともに貨泉1点、さらに、壱岐市の原の辻遺跡では貨泉10点、対馬市のシゲノダン遺跡(豊玉町佐保)では貨泉1点、さらに、鳥取市青谷町の青谷上寺地(あおやかみじち)遺跡では貨泉4点である。また、御床松原遺跡に近い福岡市西区の元岡遺跡では五銖銭1点、貨泉8点が出土している(武末2002、297頁)。

また、小田富士雄氏によって江戸時代に山口県宇部市沖ノ山から半兩銭20点、五銖銭96点、破片19片に出土したことが確認されている(小田1992)。また、北九州小倉南区守垣遺跡からは五銖銭1点が出土している。この多量に銅銭が出土した例は韓国にも同じく見られる。

半島地域における漢代貨幣の出土事例では、紀元後の1～3世紀では全羅南道海南の郡谷里貝塚(1世紀中盤)から貨泉(新の王莽の円形方孔銭で、“貨泉”の2文字を陽鑄。AD14年に初めて鑄造、1寸[2.25cm]、重さは5銖[3.19g]、後漢の光武帝の建武16年[AD40年]に前漢の五銖銭が復活したが、貨泉は私鑄された)、また、慶尚南道の麗水市の巨文島からは五銖銭が980点、慶尚南道金海市の会峴洞貝塚では貨泉1点、慶尚北道の慶山市の林堂洞遺跡では五銖銭3点、済州島の山地港では五銖銭4、貨泉11、大泉五十(新の王莽代の円形方孔銭で、大泉五十と陽鑄。AD7年から14年まで鑄造)が2点、貨布(新の王莽がAD14年に初めて鑄造、20年に再鑄。方肩方足の形で上部に円形の孔、長さは5.8cm、幅は2.4cm、重さ12g)1点、済州島の北済州郡の終達里貝塚(島の東北部)からは貨泉1点、済州島の西北部の錦城里の住居址遺跡からは貨泉2点である。

3世紀末に編纂された『三国志』巻30の「魏書」韓伝には済州島の習俗を記録して「乗船往来、市買韓

中」とあり、『後漢書』卷85の韓でも「乗船往来、貨市韓中」とあって、濟州島の“海村”の人々が渡海して半島南部地域の「韓」に往来していた生活相が確認される。『三国志』卷30の倭人伝においても「対馬国……無良田、食海物自活、乗船南北市糶」「一大(支)国……差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糶」との記録があり、九州西北部地域の対馬国と一支国の住民がともに半島地域に渡って穀物を買入れその不足を補っているのである。そこには故岡崎敬氏が描いた北部九州海域の“海人”の海上往来の生活相があり、この“海人”の生活相は半島南部の多島海にも描かれるのであり、その基盤は武末氏が描いた“海村”である。武末氏はこれをまとめて「弥生時代中期には韓半島南部の海村と西日本(とくに北部九州)の海村のあいだには、相互に往来する海村独自の世界が構築された」とみている。

王莽の治世の頃「民私以五銖錢市買」(民、私に五銖錢を以て市買す)、『漢書』卷24下・食貨下)との記録があり、前漢の武帝の元狩五年(BC118年)に鑄造された五銖錢が社会に流通する様子を伝えている。

この五銖錢のほか漢の銅錢が半島南部と九州西部の“海村”から出土することは、両地域の往来と経済交流を第一次として、またその内地部に連なる二次的な交流を説明している。

(3) 金属器の交流

青銅器の製造は西アジアでは早くB.C3000頃に始まり、東アジアの中国ではB.C2000年代初には製造が始まるとされる。(田中琢・佐原真『日本考古学事典』三省堂、2003年2月)。銅と錫と鉛を加えた青銅器が武器や祭器としての能力とその形態と装飾と重量などが表現する荘厳性から生まれる価値が威信を表徴するこの青銅器の文化が極東の半島と列島の地域に伝播した「海域圏」の交流の歴史を整理しよう。

ところで、金貞培氏はデンマークのC・Jトムセン(Christian Jurgensen Thomsen)が『北方古文物入門(Ledetraadtil Nordisk Old kyndiighed)』(コペンハーゲン、1836年)のなかで説いた石器時代、青銅器時代、鉄器時代の三分法を批判して、社会経済的な側面の特徴から時期区分すべきことを指摘していた(金1)が、この三つの道具が社会経済を進め部族の社会から国家の社会へと進展させたことは認められてよい。

また、西谷正氏は半島地域の歴史の区分論を整理し、なかでも土器の特色を重視して「旧石器時代／櫛目文土器時代／無文土器時代／原三国時代／三国時代」との区分を提示されていた(西谷1982)。

そこで、青銅器の交流、そのはじめは半島地域から列島地域に伝播するが、やがて列島地域から半島地域へ渡ることにもなる。

【青銅器・銅鏡の往来・交換】

岩永省三氏の整理(岩永1991)によれば、「朝鮮半島から列島へ本格的に青銅器がもたらされ始めたのは、弥生時代前期末から中期初頭にかけてであり」、その器種は「細形銅劍・細形銅矛・細形銅戈・多鈕細文鏡・銅鉞」であるとされる。そこで、列島地域では半島地域の青銅器製品と区別しにくい細形の銅劍・銅矛が製造されるが、その理由を「それらを製作したのが、おそらくは朝鮮半島から渡来した鑄造工

人であること」「製作を依頼したのが弥生人社会であったとしても、当初は鑄造工人の製品をそのまま受け入れざるをえず、弥生人の好みを強制できなかったこと、などが考えられ」と考察している(117頁)。

しかし、中細形銅剣等の列島独自の青銅器が出現する背景について、岩永氏は弥生時代「前期末から中期初頭にかけて無文土器文化人集団がある程度的人数で渡来したことはまちがいないだろうが」、「彼らはおそらくは後続の渡来者が跡絶えたかないしは激減したために、周囲の弥生人集団とすみやかに同化していった」が、その技術を継承した弥生人達も半島地域の武器の青銅器の新情報は乏しく、「列島人の意向が強く反映されうる環境ができてきた」と説明している。

一方、列島地域から半島地域に渡った青銅器にも各種の利器と青銅鏡があるが、小田富士雄氏と武末純一氏が整理された通覧(小田・武末1991)によれば、半島地域から出土した列島地域製の青銅利器ははやく1917年に鳥居龍蔵によって①「(伝)慶尚南道金海発見の中広銅矛」が知られた。さらに釜山市の東亜大学校博物館が所蔵する②「(伝)慶尚南道金海市明法洞出土の広形銅矛」、③「慶尚南道固城(東外洞)貝塚出土の広形銅矛」、④「慶尚南道金海郡酒村面良洞里出土の変形細形銅剣・異形中細形銅矛」、⑤「慶尚北道大邱市晩村洞出土の中広形銅戈」、⑥「(伝)江原道発見の中広形銅戈」が列挙される。ただ、両氏は「青銅武器にあつては中細形式については北部九州産と決定するには問題が残るものの、中広形・広形についてはもはや韓国で製作されなくなっているため、北部九州産とするのに異論ないであろう」とまとめるように、④の「変形細形銅剣」は対馬市の佐保シゲノダン遺跡のほか対馬市上県町白岳遺跡、福岡県三潴町塚崎遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡からも出土しており、「北部九州産青銅利器の韓国における分布は、慶尚南道金海市付近と慶尚北道大邱市付近に集約される傾向がうかがえる」と整理される。また、岩永氏(岩永1991)はこれらに加えて、「慶尚北道九政里および竹東里出土の細形銅戈は、福岡県須玖岡本13号甕棺や福岡県水城出土の細形銅戈と同型式である」例を紹介する。

【銅鏡】では、前漢の日光鏡を模した小銅鏡(韓鏡)が慶尚北道永川郡琴湖邑魚隠洞遺跡と大邱広域市西区坪里洞遺跡から出土しており、前者からは韓鏡12面(渦文鏡11面、八乳放射線文鏡1面)が、後者では韓鏡5面(渦文鏡4面、放射線文鏡1面)と四乳仿龍文鏡1面が漢鏡とともに出土している。(小田・1982)

この原三国時代の小銅鏡は初期では縁が5cmの細いものから7cm超のものへと変化するが、魚隠洞遺跡の4面の渦文鏡との同範鏡が佐賀県三養基郡上峰町の二塚山46号甕棺墓から出土している。

この弥生「後期初期には北部九州にもたらされ」た韓鏡は「やがて韓鏡をモデルとした北部九州での弥生時代小型仿製鏡(倭鏡)の製作を開始させているのである。」(高倉1991)が、一方、半島地域に出土する倭鏡では、①釜山大学校蔵の「(伝)慶尚南道咸安郡伽倻面沙内里鏡」、②「済州島済州市健入洞鏡(山地港鏡)」と③韓国国立慶州博物館蔵の菊隠李養璿蒐集文化財資料の4面(1面は〔伝〕慶尚南道金海郡酒村面良洞里、3面は出土地未詳)の6面と整理されている。この中では、③の出土地未詳の3面は北部九州の佐賀県礫石鏡や同県白石鏡、また、福岡県本庄鏡、山鹿1号土壙墓鏡、同県亀ノ甲鏡、鹿児島県外川江鏡等にも面径の7~10cmなど背文の各要素の構成が同様であることから、①と③の5面は「銅質からみても日本産の小型仿製鏡として良」く、「韓国出土の小型仿製鏡(倭鏡)はいずれも……(中略)……九州の弥生時代後期中頃から後半にかけて製作されたものである」とまとめられており、「韓半島の南海岸地方に分布しているようである。」(小田・武末1991、159頁)と整理される。

上野祥史氏は韓半島南部の3世紀から7世紀にかけての遺跡から出土する鏡は21件を整理されたが、遺跡年代4世紀の慶尚南道金海郡酒村面良洞里441号墳出土鏡の方格T字鏡は「倭における鏡の配布主体である畿内勢力からの直接流入と、その配布をうけた倭の勢力を介した二次的な流入が想定され」、その前者では「倭における鏡の論理・価値体系をともなった流入と、その論理・価値体系から切り離された流入」の合わせて三つの可能性を指摘する(上野2004、414頁)。この三つ可能性のなかで半島南部地域に流入した倭鏡はさらに、慶南・昌原市三原洞18号甕棺墓出土の内行花文倭鏡、慶北・慶州市皇南里出土の振紋鏡があげられており、この3鏡がいずれも4世紀、4世紀後半の製作の鏡と遺跡とされるが、半島南部地域と列島の倭との地域間交流の証である。

【半島地域の鉄・鉄器の生産と流通】

朝鮮半島における鉄器の起源について、村上恭通氏(村上2008)は、その最古は「平安北道(涓原郡)龍淵洞積石塚出土品であり、戦国時代後期の燕国産鉄器そのものであり、中国では「鏹」(かく)と呼ばれる農具(鉄斧)の刃先とされるものである(151頁)と言う。その年代はおよそ紀元前3世紀とされている(李南珪2001)。『史記』卷69・貨殖列伝に「夫燕……北隣烏桓夫余、東綰(ワン)／すべる。むすぶ。つなく。)穢貉朝鮮真番之利」とあり、燕と「朝鮮」との経済交流の盛んであったことが文献からも知られる。

また、半島地域の中西部の地域では忠清南道扶餘郡合松里、全羅北道長水郡南陽里、忠清南道唐津郡素素里では「鏹」と鑿がセットで副葬されており、「鏹」は双合筭であり、燕の製鉄技術と半島地域に在来の青銅器の鑄造技術の複合によると言う半島地域における生産技術の変容の跡を指摘している(村上2008、152頁)。その年代は「前4世紀後半頃が上限となろう」と春成氏は村上論を整理して(春成2008、160頁)、鉄文化の始まりの上限をあげうる見解を示している。

そこで、半島南部における鉄の文化事情を考古学が提供する情報から観察しよう。

隣接する中国戦国の燕から流入した鑄造鉄器とその技術は半島地域にその変容の跡が確認される。東潮氏によれば、半島の鉄器の初見の例は「北部地域では、咸鏡北道会寧郡五洞、咸鏡北道茂山郡虎谷洞など、紀元前5～4世紀で、戦国時代(燕)に併行する時期である。南部地域では、南陽里(全羅北道長水)・合松里(忠清南道扶餘)で、紀元前3～2世紀にさかのぼる」(東1999、16頁)と言う。

李南珪氏は半島地域の初期(鉄器の使用開始から三国時代直前まで)鉄文化の時間差と地域差の点において「①清川江以北地域②豆満江流域③大同江・載寧江流域④漢江流域⑤洛東江流域⑥その他の地域」の6地域に区分して整理された。(李南珪1991)

また、東潮氏(東1999)は「東北アジア諸地域の鉄」の事情を出土遺物とともにを整理され、半島北部の「楽浪郡、玄菟郡と遼東郡」、「夫餘」、「弁韓」、「辰韓」、「馬韓」の5地域に鉄器の文化の多様性を分類している。このことは半島地域と一口に言っても、西北部、東北部、東南部、南西部とでは鉄の文化は多様であり、また各地域も細分されることの確認である。

この半島地域の地域的かつ多様な鉄文化のなかで、半島と列島の地域における鉄の文化交流に大きく関係する楽浪地域の鉄器について、東氏は「漢系統」と「非漢系統」に大きく分類する。この鉄の文化は「三韓・倭の鉄器と不可分の関係にある」こと、即ち、楽浪地域の鉄器の生産とその南部への普及は双

方向の面があることを指摘している。例えば、東氏は平安南道龍岡郡葛峴里甲墳や咸鏡南道金野郡の所羅里土城出土の「板状鉄斧」は「弁辰地域から供給された“鉄”であろう」と説明する(23頁)。かの『三国志』弁辰伝「国出鉄、韓、濊、倭皆従取之」の記録に附合する事例と説かれる。

そこで、楽浪郡から南部の弁韓地域に伝わった文物には銅鏡、貨銭(前述)、漆器、鉄鼎、銅鍔(金海大成洞古墳29、47号墳)、鉄鋌などが知られているが(東1999「無文土器・原三国時代の鉄器出土地地名表」441頁)、近年では慶尚南道の茶戸里(昌原市東邑)遺跡の文化が楽浪文化とのつながりをよく説明している。(国立中央博物館2008)

前漢の鏡や五銖銭や筆の出土はこの半島南部地域、武末氏の提案に言う海村と楽浪郡との通交、さらに北部九州産の銅矛の出土は倭の地域との交流を想起させる。(李健茂1992、井上主税2008)

東氏が整理している弁韓、辰韓、馬韓地域に相当する鉄鋌を埋葬する遺跡は、慶尚北道に42古墳(高霊郡池山洞古墳群ほか)、慶尚南道では61古墳(釜山広域市福泉洞古墳群ほか)、全羅南北道では9古墳(霊光郡禾坪里下花B号墳ほか)、忠清南北道では5古墳(中原郡樓岩里1号墳ほか)を数え、膨大な量の鉄鋌を出土している(東「鉄鋌出土地地名表」453頁)。

茶戸里の鉄が表象する社会について、村上恭通氏(村上1998)は、茶戸里遺跡の墳墓群はBC1世紀後半からAD2世紀前半までの遺跡であるが、「茶戸里墳墓群の時代には細形銅剣がわずかにこのころのみでそのほとんどが鉄に転換した様子が見て取れ」(村上1998、27～28頁)「大量の鉄器がこの時期から副葬されることと併せて考えると、鉄器の所有が社会的ステイタスを示すという威信財としてすでに成立していた」のであり、まさに弁韓・辰韓の鉄が先進地帯の楽浪には供給されるが、南部では威信財の段階である。

鉄を所有することが社会的ステイタスを表現する段階は「鉄は国家を造る」段階の初期である。鉄の普及が進み首長の小国家の統合が進む段階は3～4世紀の交代期あたりにその契機が見られる。

村上恭通氏が313年に楽浪郡、翌314年に帯方郡が高句麗の攻撃によってその統治機構が崩壊すると、弁・辰韓がこの2郡に鉄を供給することはなくなり、そのことは弁・辰韓における鉄と鉄器の生産が独自に発達することを促進したと、整理されている(村上1998、28頁)。その具体例は金海市良銅里古墳群や金海市大成洞古墳群の出土品のなかの武具や馬具に新たな形態の出現が見られることである。

【列島の鉄・鉄器の生産と流通】

それでは、日本列島における鉄器の使用と生産はどのように始まり、普及したのであろうか。潮見浩氏の整理を紹介しよう。

まず、日本における「鉄器の使用は、弥生時代から」であることは早くは1937年に調査された奈良県磯城郡田原本町の唐古遺跡から出土した「鹿角製刀子の柄のなかに、鉄錆」が認められたからである。これにより「鉄器は弥生時代の前期から存在したものと推測され、その「鉄器の普及はかなり後になる」が「青銅器よりも古い時期から存在し、弥生文化の成立とともにみられること」に注目されたが(潮見1979、1982)、列島地域の最古の鉄器は福岡県糸島郡二丈町石崎の曲がり田遺跡出土の鉄片から縄文時代の終末までさかのぼるとされる。(潮見1986)

また、1955年に調査された熊本県玉名郡天水町の齊藤山貝塚から出土した鉄器(刃部付近の断片で

あり、中国の戦国から前漢の手斧に通ずる)が「弥生時代初頭」の鉄器に追加されている。また、同類の鉄器が同県鹿本郡植木町の轟遺跡から出土しており、これらは鉄斧と推定されている。

潮見氏はこれらの列島における鉄器の最初期の事情を判断して、「わが国に朝鮮南部から鉄の素材がもたらされ、それに依存してわが国の鉄器が開始されたということは、現状では困難のようにみえる」(潮見1979、58頁)と言う。

初期に属する鉄器の製法が鍛造によるのか、鑄造によるかについては見解が分かれる問題であるが、楽浪郡の設置を契機に半島地域では鍛造の鉄器が普及する(東1999、118頁)。このほかにも、弥生時代前期の鉄器では鹿児島県日置郡金峰町の高橋貝塚から鉄片2、山口県下関市の綾羅木郷遺跡の鉄刀子1、鉄鉈(やりがんな)1、広島市の中山貝塚の鉄片2、兵庫県明石市の吉田貝塚の鉄片4、大阪府堺市の四ッ池遺跡の鉄刀子1など加工具と切削用に使用された工具の鉄器が出土している。

さらに、弥生時代の鉄器の出土では長崎県壱岐市のふたつの遺跡からの出土例が注目される。長崎県壱岐市芦辺の原ノ辻遺跡では弥生中期の層では石器と鉄器が、後期の層では鉄器のみが出土しており、「弥生時代の生産用具が、石製のものから鉄製のものへ転換する様相」が知られている。原ノ辻遺跡や壱岐市勝本のカラカミ(唐神)遺跡では刀子、手斧、鉈(やりがんな)などの工具類、鋤先・鍬先・鎌などの農具類、鍬(やじり)、銚(もり)、釣り針などの狩猟、漁労具などに鉄器が使用されており、弥生後期から鉄器が普及していることを知らせている。

そこで、列島西部に鉄器の普及が確認される背景に素材の鉄の生産が開始されていたのか、これらは外部からの移入であるのか、についての検討課題が生まれることになる。

壱岐市の両遺跡から出土した5～20cm程の棒状と板状の鉄を捉えて、岡崎敬氏はこれを鉄器の素材と判断して、かの『魏志』韓伝の「韓と濊と倭」が弁辰の鉄を求める記事から朝鮮南部に由来するとも理解された(岡崎1957)。また、潮見浩氏は福岡県飯塚市立岩10、28、34、35、39号墳等では前漢鏡とともに鉄製武器が出土し、福岡県前原市鎌溝遺跡、佐賀県唐津市桜馬場遺跡、佐賀県神埼郡東背振村の三津永田遺跡では後漢鏡とともに鉄製武器が出土する。前漢鏡の渡来事情は漢による四郡の設置が促進した九州地域の族長と中国との交渉があったことが考えられる。(『漢書』卷28下・地理志・燕地条「楽浪海中有倭人、分為百餘國、以歲時來獻見云」)

橋口達也氏(橋口1970)によれば、中国における鉄製武器の普及は前漢後半からであり、列島西部地域で前漢鏡とともに鉄製武器が出現するのは「紀元前1世紀後半から紀元後1世紀前半のころ」であり、「初期の鉄製武器は、中国製である可能性が大きい」と言う。

では「鉄の生産」は鉄器生産の開始時期と鉄器普及の時期を目安としてその背後に鉄生産の開始を推定すれば、鉄器の生産は九州では前期末か、中期の前半、九州以東では中期の後半。そして鉄器の普及は中期と後期の交差時期であることから、「鉄の生産は前期の末もしくは中期の前半に、まず九州で開始され、それ以東の地域では中期の後半で、全国的に広がるのは後期以降」(潮見1979、58頁)と言えると、潮見はまとめる。

宣石悦氏は鉄の交易では対馬国と一支国、即ち対馬と壱岐が半島と列島地域間の「南北に市糶」(『三国志』魏書・東夷伝・倭人条)する中継的役割を評価する。おそらく海産物と板状鉄斧や鉄鉈を交換し、また列島地域には後者と米や真珠やまた木材などとの交換が行われたことを推測する。(宣2004、

140頁)

【列島西部地域の鉄の事情】

『日本書紀』巻9の氣長足姫尊(神功皇后)摂政52年秋9月丁卯朔丙子条に「久氏等從千熊長彦詣之。則獻七枝刀一口、七子鏡一面及種種重宝。仍啓曰、臣国以西有水、源出自谷那鉄山、其邈七日行之不及。当飲是水、便取是山鉄、以永奉聖朝」とあるが、これは372年に相当するが、このように、漢江の上流かと推定される谷那鉄山(江原道の鉄原か、黄海道の谷山郡か)から採掘した鉄を倭国に送るとする伝承がある。ここで言う七枝刀は奈良県天理市の石上神宮に所蔵される「七支刀」と見られて間違いないが、その裏面の銘文は百濟人による表現であるが、そこに“先世」「以来」「未だ」「有らずの」「此の」「刀」は「百濟」の「王世子」が「倭王」の「為」に「造」った”鉄刀である。百濟が倭に鉄製品を送った具体的な事例である。

東氏の「古代東アジアにおける鉄の生産と流通」(東1999)では、三世紀の後半の半島と列島の政治社会を記録する『三国志』魏書の韓伝に「国出鉄、韓濊倭皆從取之。諸市買皆用鉄。如中国用鉄。又以供給二郡」とあり、また『後漢書』巻85東夷・韓伝にも「国出鉄。濊倭馬韓並從市之。凡諸貿易皆以鉄為貨」とあり、『三国志』魏書の倭人伝には「対馬国……乗船南北市糴」「一大国……亦南北市糴」と、また、同韓伝には済州島の社会を「乗船往来市買中韓」と海峡を往来する経済活動を記録することに注目する。

東氏の整理によれば「弥生・古墳時代をつうじて、鑄造鉄器は朝鮮半島からの舶載品とみられ、それぞれの類例が朝鮮半島に存在する」ことは容易に理解できる。東氏はかの熊本の齊藤山遺跡の鉄斧は慈江道渭原龍淵洞出土の鉄斧に類するとも指摘する。(東1999)

ただ、弥生・古墳時代遺跡から出土した鉄滓(てつし/かす)の分析によれば、現状では列島地域での製鉄の開始は、5世紀中頃と考えられ(関2008)、また「韓国に500年ほど遅れて」「古墳時代後期の6世紀の半ばには、西日本の一部に製鉄炉が現れている」とも説かれる。(穴澤2004)それ以前は、「魏志弁辰伝」の記述のとおり、半島地域から鉄素材が持ち込まれて製品化されていたと考えられている。【表Ⅲ参照】

(4) 住居の交流

弥生時代では半島地域と列島地域の間で相互に渡来と渡航する人々、また渡来・渡航地に定着するひとびとのその数量的な比較をすることは不可能であるが、常識的には半島地域から列島地域に渡来定着する人々の数はその逆の数を大きく上回ると考えられる。

そのことは住居跡や古墳に確認される。韓国では1980年代以来の経済成長によって、各地で住宅建築と道路の建設が進んだことから、範囲の広い住居跡を含む集落遺跡の発掘調査が進んでいる。(中村2001)

住居跡の代表例は『東アジア考古学辞典』(西谷正編2007、東京堂出版)等によれば以下の遺跡である。

- ①東川洞遺跡(大邱広域市北区)は1992、1993年に慶北大学校によって調査、三国時代の住居跡。

- ②大坪里遺跡(慶尚南道晋州市大坪面)1997年に慶南大学校博物館が調査、自然堤防の頂上部に
竪穴住居跡12が発掘された。
- ③漢沙洞(京畿道河南市)では崇実大学校等の発掘調査により、竪穴住居跡38、貯蔵穴34基等が発
見されている。
- ④泉田里(江原道春川市新北面)。長川里(全羅南道靈岩郡西湖面)は1984年から1986年の木浦大
学博物館による調査によって、竪穴住居跡11が発見された。
- ⑤黙谷里遺跡(慶尚南道山淸郡山淸邑)
- ⑥大坪里玉房遺跡(慶尚南道晋州市大坪面)では自然堤防を利用して、竪穴住居跡、1地区では二
重の環壕(幅2m、深さ1m)が調査されている。木柵、60余の住居跡、2地区では30余の住居跡、3地
区では10余の竪穴住居跡、4地区では1~2重の環壕、60余の住居跡(竪4mほど、幅3m、深さは20
~80cm)、5地区500余の住居跡は休岩里式を主とする。6地区は耕作地であり、7地区は2重の環壕
と20余の住居跡、8地区は住居跡、9地区では10余の住居跡が発掘された。
- ⑦梨琴洞(慶尚南道泗川市)では住居跡22基と支石墓、石棺墓、石蓋土壙墓が発掘され、松菊里型
住居跡と松菊里型甕棺が確認されている。
- ⑧検丹里遺跡(慶尚南道蔚山広域市蔚州区熊村面)は本格的な青銅器時代の遺跡、独立した山の
稜線の中央部ある海拔206.4mの高地から西に伸びる低い丘陵に位置する。1988年に釜山大学校
博物館が調査した。楕円形の298mの環壕が一つ、断面はV、U字形、深さ1.5m、広さは2mほど、内
部に竪穴住居跡42基、掘立柱建物1基、外部に50基の竪穴住居跡、支石墓3基などが発掘された。
遺跡は長径118m、短径70m、内部の面積は6000㎡となる。(『韓国考古学事典』国立文化財研究
所、2001年12月)
- ⑨川上里遺跡(慶尚南道蔚山広域市蔚州郡凡西面)1996年に東亜大学校博物館が調査。竪穴住居
跡。
- ⑩松菊里遺跡(忠淸南道扶余郡草村面)は低い丘陵地に所在する無文土器時代(青銅器時代)の大
規模な集落遺跡であり、1974年以来1997年まで順次に国立中央・扶余博物館の調査によって、遺
跡面積は30ha~61haと広大な範囲に竪穴住居址が42軒確認されている。袋状の竪穴式貯蔵穴か
らは炭化したジャポニカ米も出土している。総延長が470mの木柵列と環壕、箱式石棺墓、小型甕棺
墓を持ち、遼寧式銅剣、磨製石剣、無文土器、土器窯跡など無文土器時代の文化を伝えている。
木柵の柱は直径20~60m、柱の間隔は1.8mである。無文土器は口縁部が外反する松菊里土器。丹
塗土器も出土している。
- ⑪麻田里(忠淸南道論山市練武邑)では無文土器時代の住居跡4基が発掘された。
- ⑫無去洞玉峴遺跡(慶尚南道蔚山広域市南区)、1998~1999慶南大学校博物館、密陽大学校博物
館が調査。海拔35mの丘陵地とその下の平地に住居址と水田跡、住居址は長方形(8.0~9.0×
5.0mを最大)と方形(5.0m以内)が主流、柱穴は長方形住居では3~5個が2~3列に配置される。方
形では2つが2列を主とする。2穴の1列や柱穴のないものもある。孔列文や短斜線の無文土器、磨製
石剣、石鏃、半月形石刀、紡錘車などが出土。水田跡竪穴住居跡が54余、発掘されている。(国立
文化財研究所『韓国考古学事典』2001)

⑬ 勒島遺跡(慶尚南道泗川市) 1985～1986に釜山大学校博物館の調査により、青銅器時代後期から鉄器時代(BC2世紀中葉～BC1世紀前半)の遺跡であり、貝塚、住居址11、須玖 I 式の弥生土器、墳墓など、46ha(『韓国考古学事典』)を発掘している。(沈奉謹・金宰賢2001)

これらのなかで交流の視角から注目されるのは、松菊里遺跡とその土器である。松菊里式土器は、青銅器時代の中期を代表する形式であって、胴の部分は卵のように膨らみ、口縁部が外反する。20～40cmの規模が多く、高さは10cm程から80cmにもなるものもある。BC6～5世紀頃に現れた土器とまとめられる。(国立文化財研究所2001『韓国考古学事典』)

さらに、その松菊里型住居とは、竪穴の中央部に楕円形の窪みとともに2個の柱穴があることが特徴である。初期には扶余の松菊里、瑞山の休岩里、霊岩の長川里を中心とする半島西南部に分布するが、東南内陸部の黄江、南江の一带、大邱、慶州、蔚州、梁山などから半島中西部では安城川流域、忠清、全羅一带の広くに発掘されている。(端野2008)さらに、済州島、日本の九州地方にも有溝茎式琵琶型銅剣の分布と重なって確認される。内部中央の楕円形の窪み中に柱穴があるものは休岩里型住居址、窪みの外部に柱穴が配置されたものを検丹里型住居址とに分類されるが、楕円形の窪みの周りに柱穴がないものもある。さらに楕円形の窪みの外郭に4個の補助的柱穴が配置された大型住居址もある。この窪みは初期では石器を製造するための空間であったと考えられるが、後には貯蔵用など多様化すると理解されている。(『韓国考古学事典』)

さて、列島地域のなかで半島地域からの渡航や渡来はまず北部九州がその着船地となり、またそのやや内陸部に進む。後藤直氏は福岡市博多区所在の諸岡遺跡の調査をまとめ、そこに後期無文土器時代前半の朝鮮系無文土器が多量に発掘されており、弥生社会に一時的に渡来し、弥生社会とは一定の隔たりを保ち、やがて半島に帰還した人々を見出している。(後藤直1979)

さらに、片岡宏二氏は列島西部地域出土の松菊里型土器を整理して、半島地域から列島地域へ持ち込まれたもの、また渡来人が列島地域で製作したもの、さらに列島地域でこれを模倣したものが今日出土していることを整理して、「日本出土の松菊里型土器およびその関連土器出土」の遺跡を奈良県から長崎県までに19遺跡を確認し、また列島西部地域の各地に無文土器を確認している。(片岡1999)。

そこで、片岡氏は列島西部地域から出土した朝鮮系無文土器とそれが弥生土器と融合した擬朝鮮系無文土器を整理して、渡来人が居住する集落を確認し、かつその形態を分類している。

まず、片岡氏は朝鮮系無文土器と擬朝鮮系無文土器を出土する集落遺跡は玄界灘沿岸部に点在するタイプ(島嶼分散タイプ)と北部九州の内陸部に集中するタイプ(内陸集中タイプ)に区分する。前者には擬朝鮮系無文土器は出土せず、朝鮮系無文土器の出土も数個程度であることは、小規模な交易や偶然の漂着による遺跡と見ている。これには船着場の遺跡が発見された長崎県壱岐市の原ノ辻遺跡や福岡県の曲がり田遺跡、同県の御床松原遺跡等があり、これを島嶼タイプと命名し、後者では朝鮮系無文土器と擬朝鮮系無文土器が多量に、かつ甕、壺、高坏など各種が出土することから、弥生社会に住み着いた渡来人を発見し、これを福岡市博多区の遺跡に因んで「諸岡タイプ」、また佐賀県小城市土生(はぶ)遺跡に因んで「土生タイプ」とに分類している。【表IV参照】

「諸岡タイプ」とは「弥生時代前期末の幅の中で生まれ、その段階で朝鮮系無文土器との共伴を終えている。しかし、多くの遺跡では集落じたいが、前期末前後の時期まで先行・継続して営まれることから、

渡来集団は既存の弥生集落の一角に移住し、しかも限定された時間内に生活した後、再びいずこへか移動することが知られる」と後藤直氏の見解を継承し、朝鮮系無文土器は一部に集中して出土することから、「渡来人生活域は弥生集落の一部を占めているに過ぎない」と整理される。(片岡宏二1999)

一方の「土生タイプ」は弥生時代前期末から出現するが、主体は中期初頭から前半にかけての遺跡である。土生遺跡では、擬朝鮮系無文土器はまんべんなく出土しており、「土生タイプの渡来人居住期間は長時間で、他地に移動することなく、弥生人に同化する最後までその地に定着し」、集団として弥生集落内の一定の区域を占め、それ独自に完結に近い集落構成を作っており、やがて弥生人に同化したと理解される。(片岡1993、1999、108頁)

さて、近年注目される渡航のことは、慶尚南道泗川市勸島(釜山大学校博物館1989、沈・金2001)や釜山市東萊区萊城遺跡ほか半島南部地域から弥生土器系土器が出土することである(河1990、申・河1991)。勸島から出土した弥生系土器は列島地域産と分析されており(申・河1991)

列島地域から半島地域に渡った文物には青銅器(中広銅矛)の6点と青銅鏡6面が確認されており(小田・武末1991)、両地域間の相互の往来が創り出した文化交流にも注目される。

<参考文献>

- 東潮1999『古代東アジアの鉄と倭』溪水社
- 穴澤義功2004「日本古代の鉄生産」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
- 穴沢味光1993「遺物からみた交流と交易—日本から出ていったもの—」『古墳時代の研究』13、雄山閣出版
- 井上主税2008「茶戸里遺跡にみられる倭と関連する考古資料について」『茶戸里遺蹟発掘成果』題』国立中央博物館
- 岩永省三1991「日本における青銅武器の渡来と生産の開始」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』六興出版
- 岩永省三2005～2009「考古学—弥生時代の実年代—」1～6『九州大学総合研究博物館ニュース』NO.5～12
- 岩永省三2005「弥生時代開始年代再考」『九州大学総合研究博物館研究報告』NO.3
- 上野祥史2004「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
- 岡崎敬1957「日本における初期鉄製品の問題」『考古学雑誌』42巻1号
- 岡崎敬1982「日本および韓国における貨泉・貨布および五銖銭について」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻
- 岡部裕俊・比佐陽一郎・片多雅樹2004「三坂七尾遺跡出土貨泉について」
- 小田富士雄1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集
- 小田富士雄1992「日韓の出土五銖銭・第2報」『古文化談叢』第28集
- 小田富士雄・武末純一1991「日本から渡った青銅器」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』六興出版

- 河仁秀1990「無文土器時代」釜山市立博物館『東萊福泉洞萊城遺跡』
- 片岡宏二1991「日本出土の無文土器系土器」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』六興出版
- 片岡宏二1993「朝鮮系無文土器の弥生土器化とその社会」『MUSEUM』No.503
- 片岡宏二1999「渡来人の拡散と足跡」同『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版
- 片岡宏二1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版
- 片岡宏二2006『弥生時代渡来人から倭人社会へ』雄山閣出版「第1章渡来文化と渡来人」
- 韓国国立中央博物館1978～1991『松菊里』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（Ⅴは公州博物館1993年。Ⅵは扶餘博物館2000年に発行）
- 金京七2007「南韓地域 室塘漢代 金属貨幣와 그 性格」『湖南考古学報』第27号
- 全玉年1996「韓国考古学の時期区分と年代観」第40回埋蔵文化財研究集会『考古学と実年代』埋蔵文化財研究会
- 金貞培1979「韓国考古学에서의 時代区分問題」『韓国学報』第14輯
- 慶星大学校博物館2000『金海大成洞古墳群Ⅰ』（日本語版は2001年、六一書房）
- 国立慶州博物館1987『菊隱 李養濬蒐集文化財』
- 国立慶州博物館2007『国立慶州博物館鏡鑑』
- 国立中央博物館2008「茶戸里遺跡と日本」『茶戸里遺蹟発掘成果と課題』、293頁
- 国立中央博物館2008『갈대밭 속의 나라 다호리—그 말굽과 기록—』
- 国立歴史民俗博物館2007『弥生時代はいつから！？—年代研究の最前線—』
- 後藤直1979「朝鮮系無文土器」『三上次男先生頌寿記念東洋史・考古学論集』（同『朝鮮半島初期農耕社会の研究』〔同成社、2006年〕に所収）
- 後藤直2006『朝鮮半島初期農耕社会の研究』同成社
- 潮見浩1979「倭の鉄」上田正昭ほか『ゼミナール日本古代史』上光文社
- 潮見浩1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館
- 潮見浩1986「鉄・鉄器の生産」岩波講座『日本考古学』3「生産と流通」
- 申敬澈1980「熊川文化期紀元前上限說의 再考」『釜大史学』第4輯（後藤直訳は『古文化談叢』第8集〔1981年4月〕に所収）
- 申敬澈・河仁秀1991「後期無文土器と弥生土器系土器」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』六興出版
- 沈奉謹・金宰賢「勒島遺跡の意義」田中良之編『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』2001年、九州大学大学院比較社会文化研究院）
- 関清2008「東アジアにおける日本列島の鉄生産」王維坤・宇野隆夫『古代東アジア交流の総合的研究』国際日本文化研究センター
- 宣石悦2004「加耶の鉄と倭の南北市糴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
- 高尾浩司2001「青谷上寺地遺跡と妻木晩田遺跡—絢爛豪華な鉄器文化—」鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会編『日本海（東海）がつなぐ鉄の文化』

- 高倉洋彰1990『日本金属器出現期の研究』「第1章韓国原三国時代の銅鏡」
- 高倉洋彰1991「日本の大陸系青銅器」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』六興出版
- 高倉洋彰1995『金印国家群の時代—東アジア世界と弥生社会—』青木書店
- 武末純一1991『土器からみた日韓交渉』学生社
- 武末純一2002「弥生文化と朝鮮半島の初期農耕文化」佐原真編『古代を考える 稲・金属・戦争—弥生—』吉川弘文館
- 田中良之・溝口孝司・岩永省三・Tom Hjhman2004「弥生人骨を用いたAMS年代測(予察)」『日・韓交流の考古学』九州考古学会・嶺南考古学会
- 中村慎一編2001『東アジアの囲壁・環濠集落』平成12年度科研特定研究(A1)『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』
- 西谷正1982「朝鮮考古学の時代区分について」『考古論集—小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会—』平凡社
- 西谷正2009『魏志倭人伝の考古学』学生社
- 西本豊弘編2006『弥生時代の新年代』新弥生時代のはじまり第1巻、雄山閣
- 西本豊弘編2007『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第2巻、雄山閣出版
- 橋口達也1970「中国(戦国～漢代)における鉄器—とくに鉄製武器を中心として—」(『たたら研究』第17号)
- 端野晋平2008「松菊里型住居の伝播とその背景」九州大学考古学研究室50周年記念論文集『九州と東アジアの考古学』
- 春成秀爾1990『弥生時代の始まり』東京大学出版会
- 春成秀爾2006「弥生時代の年代問題」西本豊弘編『弥生時代の新年代』雄山閣出版
- 春成秀爾2007「大陸文化と弥生時代の実年代」廣瀬和雄編『弥生時代はどう変わるか』学生社、21頁
- 春成秀爾2008「解題」春成秀爾・西本豊弘編著『東アジア青銅器の系譜』新弥生時代のはじまり第3巻、雄山閣出版
- 春成秀爾・西本豊弘編2008『東アジア青銅器の系譜』(新弥生時代のはじまり第3巻、雄山閣出版)
- 福泉博物館2009『神의 거울 銅鏡』
- 釜山大学校博物館1989『勒島住居址』
- 宮本一夫編2005『弥生時代成立期における渡来人問題の考古学的研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 宮本一夫編2008『壱岐カラカミ遺跡 I—カラカミ遺跡東亜考古学会第2地点の発掘調査—』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 宮本一夫編2009年『壱岐カラカミ遺跡 II—カラカミ遺跡東亜考古学会第1地点の発掘調査—』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 村上恭通1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 村上恭通2008「東アジアにおける鉄器の起源」春成秀爾・西本豊弘編著『東アジア青銅器の系譜』新弥

生時代のはじまり第3巻、雄山閣出版

森岡秀人2003「貨幣」『東アジアと日本の考古学—交流と交易—』Ⅲ、同成社

森浩一1983「稲と鉄の渡来をめぐって—民俗文化の伝統を再評価する—日本民俗文化大系第3巻

吉井秀夫2002「朝鮮の墳墓と日本の古墳文化」鈴木靖民編『倭国と東アジア』日本の時代史2、吉川弘
文館

李健茂1992「茶戸里出土의 筆에 대하여」『考古学誌』第4輯、韓国考古美術研究所『福岡考古』第21号

李南珪1982「南韓 初期 鉄器文化의 一考察」『韓国考古学報』13

李南珪1991「韓国の初期鉄器と鉄生産」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』
六興出版

李南珪2001「韓半島鉄器文化の歴史—統一新羅時代以前—」鉄器文化研究会鳥取県教育委員会編
『日本海(東海)がつなぐ鉄の文化』

李榮勳1991「韓半島南部の中国系青銅器」小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』
六興出版

〔表I〕炭素14年代の較正年代にもとづく無文土器・弥生時代の実年代
(藤尾慎一郎2008)

暦年代	中国	韓半島南部	九州北部	従来の年代観	暦年代
2500					2500
	龍山	後期	岩崎上層	中期	
		櫛目文土器時代	*南福寺式		
2000			北久根式	縄文時代	2000
	1750		*西平式	後期	
	夏	水佳里Ⅲ式	*三万田式		
	1520	*淡沙里式			1500
1500	商		*天城式	時代	
		早期	*入佐式		
	1027	*突帯文土器	*黒川式		
	西周	前期			1000
		*可楽里式土器	晩期		
	770	*欣岩里式土器	早期		
	春秋	中期	*山の寺式	晩期	
		*休岩里式	*夜白Ⅰ式		
	403(453)	*松菊里式	*夜白Ⅱa式		
500	戦国		*夜白Ⅱb式		500
	221	水石里式	*板付Ⅰ式		
	202	後期	*板付Ⅱa式		
紀元前1	前漢		*板付Ⅱb式		紀元前1
	8	*勒島式	*板付Ⅱc式	弥生時代	
紀元後1新			*城ノ越式	前期	紀元後1
	25		*須玖Ⅰ式	中期	
	後漢	原三国時代	*須玖Ⅱ式	後期	
250			*高三瀧式		250
			*下大隈式		
			*西新式		

※は年代を計測した土器型式

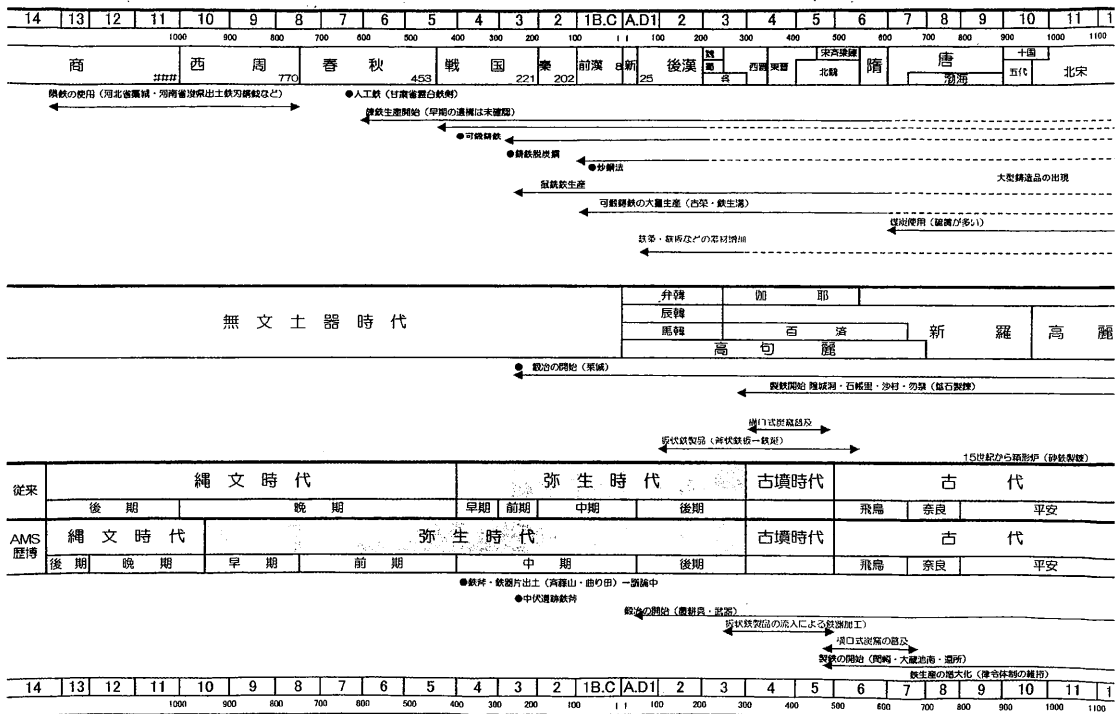
炭素14年代の較正年代にもとづく無文土器・弥生時代の実年代
(武末純一・李昌熙の併行関係と炭素14年代をもとに作成, 2008.2.5)

前回の図に比べると勒島式の下限を高三瀧式の途中までと併行させている。破線はAMSの結果をもとに推定。破線が太ければ試料数も多く、精度が高いことを示す。

〔表Ⅱ〕北部九州の弥生土器と朝鮮半島南部の無文土器・三韓土器の併行関係

550		400		200			100		B.C.		A.D.		100		150		250	
縄文土器		弥生土器														古式土師器		
晩期		早期		前期			中期			後期								
広田式	黒川式	山ノ寺式	夜臼式	板付Ⅰ式	板付Ⅱ式			城ノ越式	須玖Ⅰ式	須玖Ⅱ式	高三瀨式	下大隈式	西新式	宮の前式				
					a	b	c											
近畿編年		先Ⅰ期		Ⅰ期			Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期		庄内式期						
(漢沙里式 突帯文)		欣里式	先松菊里	松菊里式	水石里式			勒島式	古		中	新	古式新羅 加耶土器 古式百濟土器					
早期		前期	中期		後期			前期		後期		三国土器						
無文土器										三韓土器								
1期				2期	3期			4期		5期								
朝鮮の青銅器文化														(武末純一2003)				

〔表Ⅲ〕東アジアの鉄及び鉄生産略年表
(関清2008)

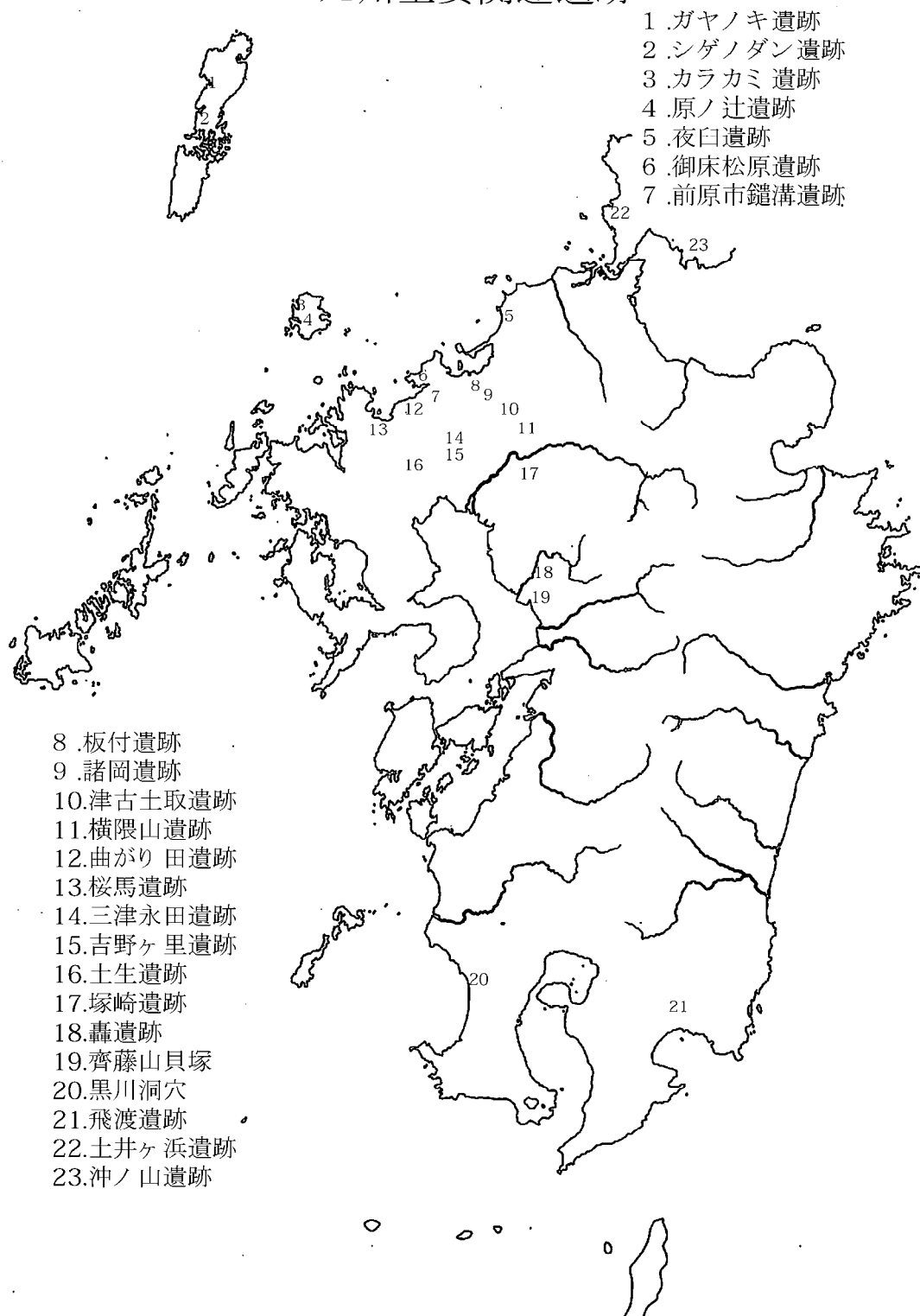


〔表IV〕渡来人集落の各タイプとその集落

(片岡2002)

		主要遺跡名	所在地		
高嶼タイプの遺跡	(前期末～中期初頭)	天ヶ原遺跡	長崎県老岐郡勝本町		
		古田遺跡	長崎県北松浦郡小佐々町楠泊免		
		里田原遺跡	長崎県北松浦郡田平町		
		曲り田遺跡	福岡県糸島郡二丈町石崎		
		綾羅木郷遺跡	山口県下関市綾羅木		
	(中期後半)	オテカタ遺跡	長崎県下県郡巖原町豆酸		
		大田原遺跡	長崎県下県郡峰町		
		原の辻遺跡	長崎県老岐郡芦戸町		
		沖ノ島遺跡	宗像郡大島村沖の島		
		御床松原遺跡	福岡県糸島郡志摩町大字御床		
		六連島遺跡	山口県下関市大字六連島字音次郎		
		秋根遺跡	山口県下関市秋根町		
		内陸タイプの遺跡	諸岡タイプの遺跡 (前期末)	諸岡遺跡	福岡市博多区諸岡岡ノ前
				板付遺跡	福岡市博多区板付
那珂君休遺跡	福岡市博多区那珂				
那珂遺跡	福岡市博多区那珂1丁目				
三国の鼻遺跡	小郡市津古及び横隈				
横隈鍋倉遺跡	小郡市横隈字鍋倉				
みくに東遺跡	小郡市横隈字鍋倉				
横隈山遺跡	小郡市三沢古賀				
江津湖遺跡	熊本県熊本市健軍町苗代津				
御幸木部町	熊本県熊本市御幸木部町				
石の瀬遺跡	熊本県宇土市石小路				
土生タイプの遺跡 (中期初頭～中期前葉)	土生遺跡		佐賀県小城郡三日月町土生		
	自在遺跡		佐賀県小城郡小城町		
	切畑A遺跡		佐賀県神埼郡神埼町大字城原		
	上黒井遺跡	佐賀県神埼郡千代田町大字姉			
姉遺跡	佐賀県神埼郡千代田町大字姉				
黒井遺跡	佐賀県神埼郡千代田町大字姉				
貴別当神社遺跡	佐賀県神埼郡千代田町大字下西				
鍋島本村南遺跡	佐賀県佐賀市鍋島町大字本村南				
津留遺跡	佐賀県佐賀市鍋島町大字八戸溝				
宇土城跡遺跡	熊本県宇土市古城町・神馬町				

九州主要関連遺跡

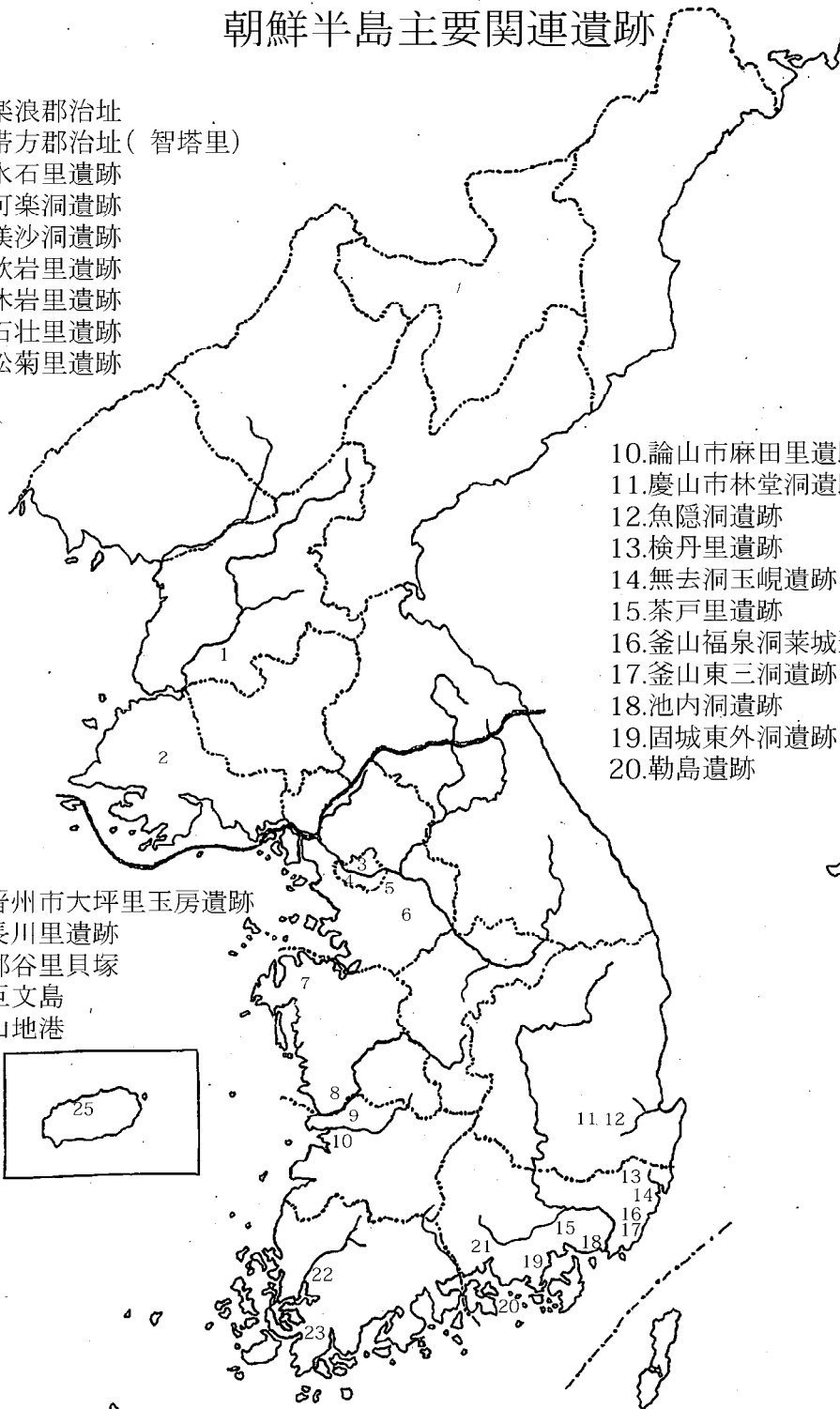
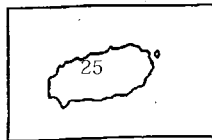


朝鮮半島主要関連遺跡

1. 渠浪郡治址
2. 帶方郡治址(智塔里)
3. 水石里遺跡
4. 可樂洞遺跡
5. 湊沙洞遺跡
6. 欣岩里遺跡
7. 休岩里遺跡
8. 石壯里遺跡
9. 松菊里遺跡

10. 論山市麻田里遺跡
11. 慶山市林堂洞遺跡
12. 魚隱洞遺跡
13. 檢丹里遺跡
14. 無去洞玉峴遺跡
15. 茶戸里遺跡
16. 釜山福泉洞菜城遺跡
17. 釜山東三洞遺跡
18. 池内洞遺跡
19. 固城東外洞遺跡
20. 靑島遺跡

21. 晋州市大坪里玉房遺跡
22. 長川里遺跡
23. 郡谷里貝塚
24. 巨文島
25. 山地港



第2章 文献・文字史料から見る古代日韓の地域間交流

第1節 BC1世紀～AD1世紀の古代日韓の地域間交流

(1) 中国文献から見た日韓の地域間交流

列島地域の弥生中期の後半から後期の後半に及ぶ時代に並行する半島地域の歴史は三韓時代にはほぼ相当する。この時代の列島地域の歴史は中国王朝の正史類、なかでもその東夷伝に記録される。しかし、その記録は中国の王朝側が記録した朝貢・貢献の記録が中心であり、半島と列島の両地域間の交流を考察する視覚では、中国の文献は隔靴搔痒の感がある。

とは言え、中国王朝とこの両地域との通貢を通して、両地域ではその地域を代表する小地域の国家、ここでは自然地理的な条件に限定された小国家から、それらが連合と戦勝等によって統合されたより広い国家、あるいはそこに至る過程の国家群の交流が進行していたことが考察される。

今、この時代の中国正史に記録された両地域の中国王朝への通貢記事から、両地域の関係を見よう。

【古朝鮮（衛氏朝鮮）の社会—漢の郡県統治の前提—】

BC108年と翌BC107年に朝鮮半島の北部を中心とする地域に設置された前漢の郡県、いわゆる漢の4郡は盛衰を経て、楽浪郡は313年に高句麗の攻撃を受けて、また3世紀初に公孫氏によってこの郡の南部に設置された帯方郡が314年に中国東北部の遼西へ撤退するに至るが、この400余年の郡県の歴史は、まさに古代の半島と列島の両地域の交流が古代国家の関係史として進行する前段階である。

そこで、留意すべきことは、この時代、朝鮮半島と日本列島はただ半島と列島の語によって括られる如くに、政治的にも、社会的にも一元的な、また単層の社会ではなかった点である。少なくとも、司馬遷の『史記』巻115・朝鮮伝に見られるが、古朝鮮の社会には中国東北部の燕をはじめとする勢力に押された人々が流入しており、そこに大きくは二元的な社会と文化が生じていたことである。

即ち、『史記』朝鮮列伝からは、古朝鮮の地では土着民に加えて、中国東北部や山東半島地域からの移住民がひとつの社会を築き、また、その周辺に「真番」「朝鮮」の政治社会が存在したことが知られるのである。

この朝鮮半島の西北部に多様な政治社会が存在したことは、『史記』以後の歴史書にも見られる。例えば、『魏略』(魏・魚豢撰、3世紀末の成立)の逸文を編修した張鵬一の『魏略輯本』(1924年)巻21・朝鮮にも「中国亡命」集団が「朝鮮」のなかに一定の勢力を占めていたことが読みとれる。

また、3世末の陳寿が撰した『三国志』巻30・魏書・東夷伝・東沃沮にも「漢初、燕亡人衛満王朝鮮、時沃沮皆屬焉」とあり、同じく、「衛満朝鮮」には「燕齊趙の民」が流入した社会があり、この朝鮮を沃沮、濊、高句麗、辰韓が取り巻いた多様な政治社会が半島地域に存したことが理解される。

一方、列島地域の政治社会は中国の文字記録には僅かに「倭」や「倭人」の語として現れるが、その居住地や社会を理解するには余りに模糊とした記録である。この段階では「倭」とは中国大陸の東方の海域に住む種族として理解されていることが知られるばかりで、この「倭人」と半島地域との交流は文献か

らはうかがうことは困難である。

【史料 I : BC1～AD1世紀】

- ・『山海経』第十二海内北経「蓋國、在鉅燕南倭北、倭属燕。朝鮮在列陽東、海北山南、列陽属燕」
- ・『論衡』第八・儒增篇「周時、天下太平、越裳献白雉、倭人貢鬯」
- ・『論衡』第十九・恢国篇「成王時、越常献雉、倭人貢暢」
- ・『史記』卷115・朝鮮列伝
朝鮮王満者、故燕人也、自始全燕時、嘗略属眞番、朝鮮、為置吏、築鄣塞。秦滅燕、属遼東外徼。漢興、為其遠難守、復修遼東故塞、至涓水為界、属燕。燕王盧綰反入匈奴、満亡命、聚党千餘人、魍結蛮夷服而東走出塞、度涓水、居秦故空地上下鄣、稍役属眞番朝鮮蛮夷及故燕齊亡命者、王之。都王險。
- ・『魏略輯本』(1924年) 卷1・朝鮮
燕人衛満亡命、為胡服東渡涓水、詣準降、説準求居西界。故中国亡命、為朝鮮藩屏。準信寵之拜以博士賜以圭。封之百里、令守西邊。満誘亡党、衆稍多。乃詐遣人告準言漢兵十道至、求入宿衛。遂還攻準、準與戰不敵也。
- ・『三国志』卷30・魏書・東夷伝・濊
濊南與辰韓、北與高句麗、沃沮接、東窮大海。今朝鮮之東皆其地也、戸二萬。昔箕子既適朝鮮、作八條之教以教之。無門戸之閉而民不為盜。其後四十餘世、朝鮮侯準僭稱王。陳勝等起、天下叛秦。燕齊趙民避地朝鮮數萬口。燕人衛満、魍結夷服、復來王之。漢武帝伐滅朝鮮、分其地為四郡。自是之後、胡漢稍別。

〔参考文献〕

- 井上秀雄1973「中国文献にあらわれた朝鮮、韓、倭について」(『日本書紀研究』第7巻、後に、井上『任那日本府と倭』[東出版寧楽社、1978年]に所収)
- 井上秀雄1975「中国古典の朝鮮と倭」(国分直一編『倭と倭人の世界』毎日新聞社)
- 江上波夫1979『ゼミナール日本古代史』上の「序」光文社
- 藤井重雄1969「倭人管見—論衡と後漢書烏桓鮮卑伝—」(『新潟大学教育学部紀要』第10巻第1号)
- 三上次男1966「古代の西北朝鮮と衛氏朝鮮国の政治・社会的性格」(同『古代東北アジア史研究』吉川弘文館)
- 李丙燾1976「衛氏朝鮮興亡考」同『韓国古代史研究』博英社〔邦訳は『韓国古代史研究—古代史上の諸問題—』学生社、1980年〕

【楽浪郡と玄菟郡—半島の多様性と列島社会—】

前漢の武帝は朝鮮(衛氏朝鮮)の衛右渠が外臣の職約に反して朝鮮の南にある眞番が漢王朝へ朝貢する道を塞いだことを怒り、元封3年(BC.108年)に陸海の軍を派遣して朝鮮を滅ぼした。そこで、朝鮮の

故都(王儉城)の地、即ち、今日の平壤市楽浪区域に朝鮮県を設置し、計15県を統括する楽浪郡の治所をここに置いた。同様に朝鮮に属していた地方にも真蕃郡、臨屯郡、玄菟郡の3郡を設置したから、朝鮮半島の北部全体と南部に及ぶ朝鮮の地は漢の郡県統治に新しく編成されることになった。

4郡のなかの臨屯郡と真蕃郡の郡治の所在は『資治通鑑』巻21・漢紀13・世宗下之上に引かれた『茂陵書』のなかに、「臨屯郡、治東曉縣、去長安六千一百三十八里、領十五縣。玄菟郡、本高句驪也、既平朝鮮、併開為郡、治沃沮城、後為夷貊所侵、徙郡句驪西北。真蕃郡、治雲縣、去長安七千六百四十里、領十五縣。余據後廢臨屯真蕃二郡」とあるように、2郡の治所は長安から6～7千余里、およそ3千km内外の地にあったが、正確な所在地は今日では不明である。

ところで、真蕃の名は『史記』巻69・貨殖列伝には「夫燕……中略……北、隣烏桓夫余。東、縮(すべる)穢貉朝鮮真蕃之利」とあり、また同巻115・朝鮮列伝にも「朝鮮王滿」の武威の前に、真蕃と臨屯が服属したと云う(「以故滿得兵威財物、侵降其旁小邑、真蕃臨屯皆來服屬」)記録からも、真蕃臨屯の2郡は楽浪郡に接する位置にあることが解る。この真蕃郡の治所という書縣については、今日、その候補地が考古学上の知見からは確認されてはいることからも、治所を全羅道を含む半島南部に推定する南在説のほか、京畿道にこれを推定する北在説がある。(山尾1985年)

4郡のなかでは長安から最遠の地に郡治を置く真蕃郡は『漢書』巻7・昭帝紀に「始元五年(BC82)夏、罷儋耳真蕃郡」とあり、『後漢書』巻85・東夷伝・濊にも「至昭帝始元五年、罷臨屯真蕃、以并楽浪玄菟」ともあって、BC82年には臨屯、真蕃の2郡は廃止され、その属県は隣接の楽浪、玄菟の2郡に編入されたのである。

かくて、半島中・北部は真蕃臨屯2郡の県を編入した所謂「大楽浪郡」と玄菟郡の治下のなかで僅かに朝鮮半島の地に及ぶ県、そして南部には郡県支配に属さぬ地域が存することとなったが、後述するように、廃止された2郡の全県が楽浪郡に編入されたわけではない。

一方、玄菟郡は『漢書』巻7・昭帝に「元鳳六年(BC75)春正月、募郡国徒、築遼東玄菟城」とあり、前述した2郡の改廃という漢の東方政策に連動して、その郡治が遼東に移動した。この所謂「第2玄菟郡」は漢の東方政策が後退したことを示しており、『三国志』巻30・魏書・東夷伝・東沃沮に「(前略)以沃沮城為玄菟郡。後為夷貊所侵、徙郡句驪西北、今所謂玄菟故府是也」とあるように、「夷貊」即ち、高句麗の抵抗を受けて初期の治所から後退したのであり、旧玄菟郡の東辺の属県は楽浪郡に編入されたものと推量される。

この朝鮮半島東北部に及ぶ第2玄菟郡の規模については『漢書』巻28・地理志第8下に「玄菟郡。武帝元封四年(BC.107)開。高句驪、莽曰下句驪、属幽州〔応劭曰、故真蕃朝鮮胡国〕。戸四万五千六、口二十二万一千八百四十五。県三。高句驪〔前略……応劭曰、故句驪胡〕、上殷台、西蓋馬」と属県は少ない。また、大楽浪郡についても「楽浪郡。武帝元封三年開。莽曰楽鮮、属幽州。応劭曰、故朝鮮国也……後略〕戸六万二千八百一十二、口四十万六千七百四十八。県二十五、朝鮮〔応劭曰、武王封箕子於朝鮮〕、□(言+冉)邯、沮水、含資、黏蟬、遂成、増地、帯方、駟望、海冥、列口、長岑、屯有、昭明〔南部都尉治〕、鏤方、提奚、渾彌、吞列、東曉〔応劭曰、移〕、不而〔東部都尉治〕、蠶台、華麗、邪頭味、前莫、天租」とあって、属県と戸口数とを記録する。

また、『三国志』巻30・魏書・東夷伝・東沃沮には「沃沮還属楽浪。漢以土地広遠、在単単大嶺之東、

分治東部都尉。治不耐城。別主嶺東七県。時沃沮亦皆為県」とあり、二つの都尉に統括される計12の県が楽浪郡に編入されたと考えられるから、楽浪郡の属県は13県から25県に拡大したことになる。南部都尉を置いた昭明県が旧真番郡の地を、また、東部都尉を置いた不而県とが旧臨屯郡の地を統制したのである。

東部都尉が主管した7県とは東曉県から天租までの県である。廃止された臨屯郡の治所であった東曉県に都尉を派遣せず、臨屯郡下の不而県を大楽浪郡の東部支配の拠点として重視したのは、やはり、これに接続する東北からの高句麗の圧迫に備えてのことであろう。

広域化した「大楽浪郡」では、旧真番郡の地は南部都尉が、また旧臨屯郡の地を東部都尉が治める体制が構成されていた。

そこで、郡県の社会規模を見れば、大楽浪郡では1戸当たり6.5口であり、1県当たりの戸数は2,512戸と16,270口となる。これに対して、第2玄菟郡は県は僅かに3県であり、1戸当たりは4.9口であり、1県当たりの戸数は15,002戸と73,948口となる。統計数字に誤りがなければ、この2郡の社会構成の差は甚だしい。殊に県の人戸の規模に大きな差がある。楽浪郡は25県を統轄していることに現れているが、人戸の把握が玄菟郡のそれよりも遙かに浸透していると言える。この人戸の把握の差異はその社会構成の差異を反映していよう。

ところで、この大楽浪郡と第2玄菟郡は後漢代には明確な変化を現している。『後漢書』卷23・郡国志5・第23・幽州には所謂、第3玄菟郡について、「玄菟郡〔武帝置、雒陽東北四千里〕。六城。戸一千五百九十四、口四万三千一百六十三。高句驪、遼山遼水出〔山海経、遼水出白平東。郭璞曰、出塞外御白平山。遼山小遼水所出〕。西蓋馬。上殷台。高顯、故属遼東。候城、故属遼東。遼陽、故属遼東〔東観書。安帝即位之年(106年)、分三縣来属〕」とある。また、大楽浪郡については「楽浪郡〔武帝置、雒陽東北五千里〕十八城。戸六万一千四百九十二。口二十五万七千五十。朝鮮、□(言+冉)邯、溟水、含資、占蟬、遂成、増地、帯方、駟望、海冥、列口、長岑、屯有、昭明、鏤方、提奚、渾彌、楽都」とある。

これによれば、第2玄菟郡はAD106年に遼東郡の北「二百里」の地に西遷したが、この所謂第3玄菟郡には遼東郡の3県が編入されている。この中で『漢書』卷28・地理志第8下によれば候城には遼東郡の中部都尉が派遣された要衝の県であった。また、大楽浪郡はかの25県から東曉、不而、蠶台、華麗、邪頭昧、前莫、天租の7県が離脱して18県に減少している。この7県ははじめ臨屯郡に編入されていたと推定された。

かくて、玄菟郡の再度の西遷と大楽浪郡のなかの東北部の7県が郡から離脱した背景にある政治動向は、やはり朝鮮半島の東北部に成長する高句麗の膨張を看取するべきであろう。

2世紀初の大楽浪郡では1戸当たり約4.2口、1県当たりの戸数は3,416戸、口数は14,280口である。また、第3玄菟郡のそれは1戸当たり27口、1県当たりは約266戸と7,194口である。大楽浪郡と第3玄菟郡との社会構造の数値には後者の戸数に脱字等の誤りを考えたくなるほど戸数は少ない。第3玄菟郡は第2玄菟郡より3県を増したにも拘わらず人戸の把握数が少ない。この数値に誤りがなければ、第3玄菟郡は高句驪縣を通して高句驪族を十分には把握できていなかったこと、或いは高句麗県が名目的な存在の性格であったことを暗示させる。

漢の武帝が半島地域に設置した四郡のなかで、真番郡と臨屯郡は僻遠の地であるがために楽浪郡に

併合されたが、玄菟郡が二度に渡って遼東に後退したことは偏に高句麗族の抵抗のためであった。

半島地域では漢代に始まる郡県統治の中央集権統治の機構に抵抗する高句麗と、その統治のもとで地域の支配と文化を獲得する韓とその後方の倭という大きく二つの方向が進行している。

高句麗族が郡県支配に抵抗し、韓族はこれに適合したのはその社会が氏族制の枠から家族がどれだけ自立しているかの差異と、また、狩猟社会と農耕社会の差がその要因であり、さらには、王朝が狩猟社会に施した「羈縻」策という間接統治が十分に機能しないこともあろう。この中国王朝による半島地域支配に対する抵抗と順応（或いは選択的順応）の二つの姿勢がその後の半島と列島の交流と関係の性格を生み出している。

〔参考文献〕

- 池内宏1951「前漢昭帝の四郡廃合と後漢書の記事」「楽浪郡考」「遼東の玄菟郡と其の属県」「真番郡の位置について」「漢魏晋の玄菟郡と高句麗」「公孫氏の帯方郡設置と曹魏の楽浪・帯方二郡」「曹魏の東方経略」「晋代の遼東」(同『満鮮史研究』上世・第1冊、吉川弘文館、初版。1979年第2版)
- 栗原朋信1970「漢帝国と周辺諸民族」岩波講座世界歴史4『東アジア世界の形成』I
- 大阪府立弥生文化博物館1993『平成五年秋季特別展—弥生人の見た楽浪文化』
- 田中俊明1994「高句麗の興起と玄菟郡」『朝鮮文化研究』第1号、東京大学文学部朝鮮文化研究室
- 堀敏一2006『東アジア世界の形成』汲古書院
- 山尾幸久1985年「中国史料に見える「倭」と「倭人」」(『東アジアの古代文化』44号、大和書房)
- 李成市1993『古代東アジアの民族と国家』(「第一章東アジアの諸国と人口移動」岩波書店)

【郡県の社会動向】

楽浪郡治址(平壤市楽浪区域土城里)から発掘された封泥には「楽浪大守章」「楽浪大尹章」や「楽浪守丞」「楽浪長史」の長官と次官職の印のほか、「朝鮮令印」「朝鮮右尉」「駟望丞印」「屯有令印」「東曉長印」「不而長印」「海冥丞印」「昭明丞印」など各県の長官、次官の職名の押印が多数読みとられる。こうした官吏が郡県を運営したが、郡県社会の安定は山東半島から楽浪郡へ移住する者を呼び込み、一定の勢力を育む者が生まれていた。『後漢書』卷76・循吏・王景伝には「王景。字仲通、楽浪訃郡人也。八世祖仲、本琅邪不其人……中略……乃浮海、東奔楽浪山中、因而家焉。父閔、為郡三老。更始敗、土人王調殺郡守劉憲、自称大將軍、楽浪太守。建武六年(AD30)、光武遣太守王遵将兵擊之、至遼東。閔與郡決曹吏楊邑等共殺調迎遵、皆封為列侯、閔獨讓爵。帝奇而徵之、道病卒」に見られるように、楽浪郡には「土人の王調」が太守を殺害して「大將軍楽浪太守」を自称したように、郡県統治に抵抗する勢力も発生していた。その一方では、この王調を殺害した王閔は8代祖が山東半島からの移住者であった。この王調や王閔の外にも「王光」や「王吁」等のように楽浪郡治に土着化した中規模勢力の一族もいた。

楽浪郡の政治社会はいつまでもその名のように中国本土から渡海する先のユートピアではなかった。郡県内の有力者の誕生は『三国志』卷30・魏書・東夷伝・東沃沮に「光武六年(AD30)省辺郡、都尉由此

罷。其後皆以其縣中渠帥為県侯。不耐、華麗、沃沮諸縣皆為侯国。夷狄更相攻伐、唯不耐濊侯至今猶置功曹、主簿諸曹、皆濊民作之。沃沮諸邑落渠帥、皆自稱三老、則故縣國之制也」とあって、大楽浪郡下の不耐・華麗・沃沮の「渠帥」を県侯に封じるほどに旧臨屯郡治下の沃沮族はその政治社会の民族性を維持成長させていたことが推量される。

〔参考文献〕

- 藤田亮策1948「楽浪封泥攷」「楽浪封泥續攷」同『朝鮮考古學研究』高桐書院
窪添慶文1981「楽浪郡と帯方郡の推移」『東アジア世界における日本古代史講座』第3巻、学生社)
全浩天1998『楽浪文化と古代日本』(雄山閣出版
高久健二2002「楽浪郡と三韓」西谷正編『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
田村晃一2001『楽浪と高句麗の考古学』同成社

【郡県への対応—馬韓と倭VS高句麗と新羅の対立軸の発生—】

BC108年に始まる朝鮮半島の中・北部と中国東北部にわたる中国王朝による所謂4郡の統治は一樣に成功したわけではなく、また4郡の社会も均一であったわけではない。人戸の把握を通して人身支配の組織をそれぞれの社会に浸透させるにはそれを受容する社会基盤の在り様によって、順応と抵抗の姿勢が表出する。4郡のなかの楽浪郡は313年に朝鮮半島から遼東へ撤収されるが、そこに至るまでに4郡を改廃させた政治社会の動向の根底には高句麗族や濊族、そして韓族の政治社会の構造の差異がある。

即ち、氏族の紐帯が持つ規制から人戸がどれほど自立して政治社会を形成しているのか、換言すれば、郡県制支配は人戸の個別支配を基本単位とするから、氏族の結合を維持する部制の強弱の差異によって、朝鮮半島中・北部に置かれた4郡の統治には成否が生ずることになる。

その成否とは前述したように高句麗族や沃沮族、濊族の社会の上に統治網を敷いた臨屯郡が設置後に間もなくその抵抗の故に廃止され、玄菟郡は2度の西遷を余儀なくされた一方では、所謂古朝鮮の社会を基盤とした楽浪郡が400余年に亘って存続し、さらにはその南部に増設された帯方郡は100余年近く存続した。この2郡にはその南に接する韓族と倭族の諸小国が通交していたように、前者の2郡とは好対照の対応を見ることができる。この対照的な郡県への対応差が東アジア諸民族の相互関係を生んだ一因であり、その後の東アジア世界の相互関係を規制していると考えられる。このような東アジア諸民族の対照的な郡県への対応と諸民族間の相互関係の動向は次の史料から読み取ることができる。

【史料Ⅱ：AD1世紀】

- ①『後漢書』韓伝「建武二十年(AD44)、韓人廉斯人蘇馬謚等、詣楽浪貢獻。光武、封蘇馬謚為漢廉斯邑君、使属楽浪郡、四時朝謁」
- ②同卷1・光武帝紀「建武二十年秋、東夷韓国人、率衆詣楽浪内附」
- ③同卷85・東夷伝序「建武之初、(貊人)復来朝貢、時遼東太守祭彤、威讐北方、聲行海表、於是濊

貂倭韓萬里朝貢」

- ④同卷1・光武帝紀「建武二十三年(47)冬十月、高句驪率種人、詣楽浪内属」(同卷85・東夷・高句驪「建武二十三年冬、句驪蠶支落大加戴升等萬餘口、詣楽浪内属」)
- ⑤同卷85・東夷・倭伝「建武中元二年(57)、倭奴国奉貢朝賀、使人自称大夫、倭国之極南界也。光武賜以印綬」
- ⑥同卷85・東夷・倭伝「安帝永初元年(107)、倭国王帥升等獻生口百六十人、願請見」(『翰苑』所載の『後漢書』佚文では「倭面上国」、北宋版『通典』では「倭面土国」、『唐類函』所引の『通典』では「倭面土地」)

(2) 韓国文献から見た日韓の地域間交流

半島と列島地域の交流について、韓国文献では現存する最古の編纂歴史書である『三国史記』の記録から考察することになる。この史書に編纂された、殊に2～3世紀に相当する時代の列島地域の政治社会体は「倭」「倭人」と記録される。

しかし、『三国史記』は高麗・仁宗23年(1145年)に宰相の金富軾(1075～1151)が監修した奉宣撰の紀伝体の史書である。全50巻のうち新羅本紀は12巻、高句麗本紀は10巻、百濟本紀は6巻である。

編纂対象の時代からは大きく後世の編纂ではあるが、この史書は高麗初期に編纂されたと説かれる「海東三国史」(「旧三国史」とも称される)と『資治通鑑』など中国史書を参照しており、また、新羅時代に著述された「花郎世記」(8世紀初金の大問の著述)や545年に居染夫らが修撰した「国史」があり、また新羅末の文人官僚の崔致遠の著作等を参照したであろうから、『三国史記』は編纂が当該の時代から大きく離れているということからのみでは、一概に「新羅本紀」の倭人関係記事を不信とすることは出来ない。(高1996年)

また、『三国史記』の修撰に後れること約140年にして、高麗の僧一然(1206～1289)が私撰した『三国遺事』のなかの新羅史上の遺事にも倭関係の伝承が見られる。

それらの記事は以下である。

倭や倭人が「新羅本紀」にみられるが、この時期に相当する「百濟本紀」に見られないのは、倭、倭人が新羅には非友好的関係を行っていたからである。金錫亨氏(1969)はこの倭、倭人の根拠地は北部九州であると言う。井上秀雄氏(井上1991)はさらに倭、倭人の根拠地を加羅と説いてもいる。

ただ、この「新羅本紀」の記事から倭、倭人について言えることは、倭、倭人は新羅に対立的であり、かつ「渡海」すべき海の向こうの勢力である。そこに、倭、倭人の本拠地が「ヤマト」であるとか、倭、倭人の政治社会の実態把握の上にこれらの記事が記されていないのであるから、その根拠が「加羅」や北部九州やヤマトなど特定することは的外れであろう。

いずれ、倭、倭人は新羅、百濟、加羅などとは異なる政治社会であり、海上を越えた存在であるが、また加羅地域に現れる勢力である。

ただ、このBC1世紀からAD2世紀の間では、中国史料では倭の100余国や韓の氏族が郡に通貢することが続いていた。そうであるならば、新羅を襲う倭人や加羅には共通する対新羅関係に立っていたことになる。

ただ、この時代では新羅は辰韓24国のなかの1国である。

鈴木英夫氏(1996)が明らかにするように「新羅本紀」に編年された新羅と倭、倭人、倭国との関係記事には『後漢書』東夷伝に見られる倭国と韓の記事に触発されて、新羅と倭国の通交を構想した記事がある。

【BC1世紀】

- ①『三国史記』卷1・新羅本紀「始祖赫居世八年(BC50年)倭人行兵。欲犯辺。聞始祖有神徳。乃還」
- ②同「始祖赫居世三十年(BC28年)夏四月己亥晦。日有食之。楽浪人将兵来侵。見辺人夜戸不扃。露積被野。相謂曰。此方民不相盗。可謂有道之国。吾儕潜師而襲之。無異於盗。得不愧乎。乃引還」
- ③同「始祖赫居世三十八年(BC20年)春二月。遣瓠公聘於馬韓。馬韓王讓瓠公曰。辰卞二韓。為我属国。比年不輸職貢。事大之禮。其若是乎。對曰。我国自二聖肇興。人事修。天時和。倉庾充實。人民敬讓。自辰韓遺民。以至卞韓楽浪倭人。無不畏懷。而吾王謙虚。遣下臣修聘。可謂過於禮矣。而大王赫怒。劫之以兵。是何意耶。王憤欲殺之。左右諫止。乃許歸。前此中国之人。苦秦乱。東来者衆。多處馬韓東。與辰韓雜居。至是浸盛。故馬韓忌之有責焉。瓠公者未詳其族姓。本倭人。初以瓠繫腰。度海而来。故称瓠公」

【AD1世紀】

- ①『三国史記』卷1・新羅本紀「南解次次雄元年(AD4年)秋七月。楽浪兵至。圍金城数重。王謂左右曰。二聖棄國。孤以國人推戴。謬居於位。危懼若涉川水。今隣國來侵。是孤之不徳也。為之若何。左右對曰。賊幸我有喪。妄以兵來。天必不祐。不足畏也。賊俄而退歸」
- ②同「南解次次雄十一年(AD14年)倭人遣兵船百艘。掠海辺民戸。發六部勁兵以禦之。楽浪謂内虚。来攻金城甚急。夜有流星。墜於賊營。衆懼而退。屯於闕川之上。造石堆二十而去。六部兵一千人追之。自吐含山東。至闕川。見石堆。知賊衆乃止」
- ③同「南解次次雄十六年(AD19年)」春二月。北溟人耕田。得濊王印、獻之」
- ④同「儒理尼師今十三年(AD36年)秋八月。楽浪犯北辺。攻陷朶山城」
- ⑤同「儒理尼師今十四年(AD37年)高句麗王無恤襲楽浪滅之。其國人五千來投。分居六部」
- ⑥同「儒理尼師今十七年(AD40年)秋九月。華麗不耐二縣人連謀。率騎兵犯北境。貊國渠帥以兵要曲河西敗之。王喜與貊國結好」
- ⑦同「脱解尼師今、一云吐解。時年六十二。姓昔。妃阿孝夫人。脱解本多婆那國所生也。其國在倭国東北一千里。初其國王娶女國王女為妻。有娠。七年乃生大卵。王曰。人而生卵。不祥也。宜棄之。其女不忍。以帛裹卵并寶物。置於櫃中。浮於海。任其所往。初至金官國海辺。金官人怪之不取。又至辰韓阿珍浦口。是始祖赫居世在位三十九年(BC19年)也。時海辺老母。以繩引繫海岸。開櫃見之。有一子兒在焉。其母取養之。及壯身長九尺、風神秀朗。智識過人。或曰。此兒不知姓氏。初櫃來時。有一鵲飛鳴而隨之。宜省鵲字、以昔為氏。又解韞櫃而出。宜名脱解。脱解始以漁釣為業。供養其母。未嘗有懈色。母謂曰。汝非常人。骨相殊異。宜從學以立功名。於是專精學

問。兼知地理。望楊山下瓠公宅。以為吉地。設詭計。以取而居之。其地後為月城。至南解王五年(AD8年)。聞其賢。以其女妻之。至七年(AD10年)。登庸為大輔。委以政事。儒理將死曰。先王顧命曰。吾死後無論子壻。以年長且賢者繼位。是以寡人先立。今也宜傳其位焉」

- ⑧同「脱解尼師今三年(AD59年)夏五月。與倭国結好交聘」
- ⑨同「脱解尼師今八年(AD64年)秋八月。百濟遣兵攻蛙山城。冬十月。又攻狗壤城。王遣騎二千擊走之」
- ⑩同「脱解尼師今十年(AD66年)百濟攻取蛙山城。留二百人居守。尋取之」
- ⑪同「脱解尼師今十四年(AD70年)百濟來侵」
- ⑫同「脱解尼師今十七年(AD73年)倭人侵木出島。王遣角干羽烏禦之。不克。羽烏死之」
- ⑬同「脱解尼師今十八年(AD74年)秋八月。百濟寇邊。遣兵拒之」
- ⑭同「脱解尼師今二十一年(AD77年)秋八月。阿滄吉門與加耶兵戰於黄山津口。獲一千餘級。以吉門為波珍滄。賞功也」
- ⑮同「婆娑尼師今六年(AD85年)春正月。百濟犯邊」
- ⑯同「婆娑尼師今八年(AD87年)秋七月。下令曰。朕以不德有此国家。西鄰百濟。南接加耶。德不能綏。威不足畏。宜繕葺城壘。以待侵軼」
- ⑰同「婆娑尼師今十五年(AD94年)春二月。加耶賊困馬頭城。遣阿滄吉元。將騎一千擊走之。九月。加耶人襲南鄙。遣加(召)城主長世拒之。為賊所殺。王怒。率勇士五千。出戰負之。虜獲甚多」
- ⑱同「婆娑尼師今十七年(AD96年)九月。加耶人襲南鄙。遣加(召)城主長世拒之。為賊所殺。王怒。率勇士五千。出戰負之。虜獲甚多」
- ⑲同「婆娑尼師今十八年(AD97年)春正月。舉兵欲伐加耶。其国主遣使請罪。乃止」

第2節 AD2世紀～3世紀の日韓交流

(1) 中国文献から見る日韓交流

四郡設置後の1世紀の間、韓、倭、濊、貊および高句麗は楽浪郡に通じて貢献し、邑君の称号や印綬を得て朝謁し、また内附する者がいた。しかし、楽浪郡或いは郡を介した後漢王朝への通交関係も続く2世紀には他の面が現れる。

即ち、郡県支配に対する抵抗である。高句麗と夫餘は玄菟郡と遼東郡に通交と攻撃と言う両様の対応を取っていた。高句麗は遼東郡を攻め、また、濊、貊とともに玄菟郡や楽浪郡下の華麗縣を攻撃したこともある(AD118年)。

2世紀後半、後漢の中央政權の混乱は郡県に属した周辺諸民族への統制に動揺を引き起こし、諸民族内部の支配層間に自立を進ませることになる。『三国史記』高句麗本紀に依れば、高句麗王家の長子の拔奇と小子の伊夷模が対立し、209年には伊夷模が新国を建設し、拔奇が遼東へ逃亡すると言う内紛に発展している。

また、『三国志』卷30・魏書・韓伝には前述したように、「桓靈之末(146～189年)」に韓と濊が彊盛となって、郡県がこれを統制出来ない事態のなかで、郡県の民は「韓国」に流入したと言う。この郡県の民が

その農工の知識と技術を持って「韓国」へ集団的に移住した事態は、「韓の国」内の政治社会に小国家的社会への結合を促す影響を及ぼしたと見なければならぬ。

このような郡県支配に対応する韓族と高句麗族の動向は、王権の成長とそれへの各氏族の集中による国家形成の一段階であると見るべきであり、この動向は海を越えた倭国にも見ることができる。下記の史料□に見るように、倭国の内乱と女王卑弥呼の推戴に至る動向は、後漢末の王朝中央の混乱と朝鮮半島の南北における王権の成長過程と密接に関係する広範な連鎖と見なければならぬ(池田1998)。倭国における王権の成長が朝鮮半島の動向と隔絶しては成されないことは卑弥呼の時代にも明らかである。それはここまで連続として継続されてきた朝鮮半島と日本列島の彼我を隔絶しない一体的な交流があったからである。

【AD2世紀】

- ①『後漢書』卷85・東夷・高句麗「和帝元興元年(105)春、復入遼東、寇略六縣、太守耿夔、擊破之、斬其渠帥」
- ②同卷5・安帝紀「永初三年(109)春、高句麗遣使貢獻」
- ③『後漢書』卷85・東夷・夫餘「安帝永初五年(111)、夫餘王始將七八千人、寇鈔樂浪、殺傷吏民、後復歸附」
- ④『後漢書』卷85・東夷・高句麗「永初五年(111)、宮(太祖王)遣使貢獻、求屬玄菟」
- ⑤『後漢書』卷85・東夷・高句麗「元初五年(118)、復與濊貊寇玄菟、攻華麗城」
- ⑥同安帝紀「建光元年(121年)春正月、幽州刺史馮煥、率二郡太守討高句麗、穢貊、不克。○夏四月、穢貊復與鮮卑寇遼東、遼東太守蔡諷、追擊戰沒。○冬十二月、高句麗・馬韓・穢貊、圍玄菟城。夫餘王遣子、與州郡并力討破之」
- ⑦同安帝紀「延光元年(122)春二月、夫餘王遣子、將兵救玄菟、擊高句麗・馬韓・穢貊破之、遂遣使貢獻。秋七月、高句麗降」
- ⑧『三国志』卷30・魏書・高句麗「宮死、子伯固立。順桓之間(126~167)、復犯遼東、寇新安居鄉、又攻西安平、於道上殺帶方令、略得樂浪太守妻子」(『後漢書』卷85・東夷・高句麗「遂成死、子伯固立。其後濊貊率服、東垂少事。順帝陽嘉元年(132)、置玄菟郡屯田六部。質桓之間(146~167)復犯遼東西安平、殺帶方令、掠得樂浪太守妻子」)
- ⑨同卷30・魏書・高句麗「靈帝建寧二年(169)、玄菟太守耿臨討之、斬首虜數百級、伯固降、屬遼東。熹平中(172~178)伯固乞屬玄菟」
- ⑩同卷30・魏書・韓「桓靈之末(146~189年)韓濊疆盛、郡縣不能制、民多流入韓國、建安中(196~220年)公孫康分屯有縣以南荒地、為帶方郡、遣公孫模・張敞等、收集遺民、興兵伐韓濊、舊民稍出、是後倭韓遂屬帶方」
- ⑪同卷30・魏書・高句麗「公孫度之雄海東也、伯固遣大加優居、主簿然人等、助度擊富山賊、破之」
- ⑫同卷30・魏書・倭人「其國本亦以男子為王、住七八十年、倭國亂、相攻伐歷年、乃共立一女子為王、名曰卑彌呼、事鬼道、能惑衆、年已長大、無夫壻、有男弟佐治國」(『後漢書』卷85・東夷・倭人「桓靈間(146~189年)、倭國大亂、更相攻伐、歷年無主、有一女子、名曰卑彌呼」)

⑬[「中平□年(184～189)」銘環頭大刀・「中平□年五月丙午造作文刀百練清剛上應星宿□□□□」・奈良県天理市東大寺山古墳出土]

こうした郡県内の有力勢力の成長は郡県統治と軋轢を生むに至る。『三国志』巻30・魏書・東夷伝・韓には「桓、靈之末、韓濊疆盛、郡県不能制、民多流入韓国。建安中(196～220年)、公孫康分屯有縣以南荒地為帶方郡、遣公孫模、張敞等收集遺民、興兵伐韓濊、舊民稍出、是後倭韓遂属帶方」とあって、2世紀後半の「桓靈之末」即ち、後漢の桓帝(147～168年)と靈帝(168～189年)の代には、韓族や濊族が政治社会的に成長し、黄巾の乱に代表される後漢王朝の混乱にも起因して、楽浪郡とその属県の統制から韓濊が離脱し、韓族の「国」、即ち3世紀にその詳細が魏王朝に知られる楽浪郡の南に接する三韓の地に郡県から流入する者が多く現れたのである。

ところが、2世紀には後漢の内部に混乱が生ずると、周縁の郡県にも変動が生まれ、遼東方面では玄菟郡の小吏から立身した公孫度が遼東郡を拠点に自立した政権を打ち立てた。公孫度は海を渡った山東半島をも確保し、自ら「遼東公平州牧」と称し、半島地域に進出して楽浪郡を収めて、「遼東」に「王」たる地方政権の様相を呈した。その子の公孫康は楽浪郡の南部に帯方郡を開設し、「政権」の威を示したから、韓と倭の諸小国は盛んに帯方郡に通交してきた。

後漢末の混乱から遼東を拠点として自立した公孫氏は建安中(196～220年)に楽浪郡治下の屯有県以南の地に新たに帯方郡を設置し、朝鮮半島中・南部に向けた郡県支配を再編しその強化を図ったのである。公孫康は公孫模と張敞等を派遣して旧郡県の遺民を収集し、かつ、兵を興して韓と濊を討ったから、公孫氏の武威を畏れた韓族と倭族は帯方郡に「属」することとなった。帯方郡の治所は今日の黄海北道鳳山郡の智塔里土城に比定されるが、この郡に「属」するとは、政治的関係の従属姿勢を柱とした通好とこれに付随した経済・文化の交流が進行したことを意味しよう。

公孫氏の楽浪・帯方2郡の支配は長くは続かなかった。魏の明帝は公孫氏が3代に亘って遼東に基盤を置いた為に東夷諸族の魏への通好が途絶した状況を好まず、東夷に及ぶ魏の国際関係の秩序を確立させようと、景初中(237～239年)に、帯方郡太守劉昕と楽浪郡太守鮮于嗣に軍を率いて公孫淵を討たしめ、楽浪・帯方の2郡を魏の東方政策の拠点として公孫氏から奪回したのである(『三国志』巻30・東夷伝序及び韓伝)。

その効果は直ちに現れ、韓の諸国の首長である「臣智」層は2郡に通じて魏王朝から「邑君」の称号とその「印綬」を、また、次位の首長は「邑長」とその印綬を賜った。こうして「印綬」を身に付ける者は韓族社会には「千有余人」にも上ったと言う。魏の楽浪郡と帯方郡を基点とした東方政策は一段と韓族社会、さらには倭の社会に浸透してその政治社会に反応を起こすのである。

この半島地域の劇的な変動と中国王朝の政治力と文化力の前に、高句麗、穢貊、と韓、倭が素早く対応している。魏は246(正始7)年に幽州刺史の毋丘儉の軍を派遣して高句麗に大打撃を与え、高句麗の勢力を削ぐと、韓と倭は盛んに魏に通貢している。倭女王が大夫の難升米等を郡に送り、天使に朝献することを求めると、郡の太守であった劉夏が倭の使者を京都(洛陽)まで送ったが、この倭王の積極的な対応は韓の諸国が魏の慰撫を得て、魏の2郡に先を競うように通交していたことがある。(【史料】参照)

【A D 3世紀前半】

- ①『三国志』卷30・東夷伝序「公孫淵仍父祖三世、有遼東、天子為其絕域、委以海外之事、遂隔斷東夷、不得通於諸夏、景初中(237～239)、大興師旅誅淵、又潛軍浮海收樂浪帶方之郡、而後海表謐然、東夷屈服」
- ②『三国志』卷30・東夷・韓伝「景初中(237～239)、明帝密遣帶方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣越海定二郡、諸韓國臣智加賜邑君印綬、其次與邑長。其俗好衣幘、下戸詣郡朝謁、皆假衣幘、自服印綬衣幘千有余人。部從事吳林、以樂浪本統韓國、分割辰韓八国以與樂浪、吏譯轉有異同、臣智激韓忿、攻帶方郡崎離營。時太守弓遵、樂浪太守劉茂興兵伐之、遵戰死、二郡遂滅韓」
- ③同倭人伝「景初三年(239年)六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡、求詣天使朝獻、太守劉夏遣吏將送詣京都。其年十二月、詔書報倭女王曰……中略……今以汝為親魏倭王、假金印紫綬……後略……」
- ④同倭人伝「正始元年(240年)、太守弓遵遣建忠校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國、拜假倭王、并齎詔賜金、帛、錦罽、刀、鏡、采物、倭王因使上表答謝詔恩」
- ⑤同倭人伝「其四年(243年)、倭王復遣使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人、上獻生口、倭錦、緯青縑、緜衣、帛布、丹木狝、短弓矢。掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬」
- ⑥同倭人伝「其六年(245年)、詔賜倭難升米黃幢、付郡假授」
- ⑦同濊伝「正始六年(245)樂浪太守劉茂、帶方太守弓遵以遼東濊屬句麗、興師伐之、不耐侯等舉邑降」
- ⑧『三国志』卷4・魏書・三少帝紀4(齊王芳)「(正始)七年(246年)春二月、幽州刺史毋丘儉討高句麗、夏五月、討濊貊、皆破之。韓那奚等數十国、各率種落降」
- ⑨同濊伝「其(正始)八年(247年)、詣闕朝貢、詔更拜不耐濊王。居處雜在民間、四時詣郡朝謁。二郡有軍征賦調、供給役使、遇之如民」
- ⑩同倭人伝「其(正始)八年、太守王頎到官。倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和、遣倭載斯、烏越等詣郡說相攻擊狀。遣塞曹掾史張政等因齎詔書、黃幢、拜假難升米為檄告諭之。卑彌呼以死、大作冢、徑百餘步、狗葬者奴婢百餘人。更立男王、國中不服、更相誅殺、當時殺千餘人。復立卑彌呼宗女壹與、年十三為王、國中遂定。政等以檄告諭壹與、壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還、因詣臺、獻上男女生口三十人、貢白珠五千、孔青大句珠二枚、異文雜錦二十四」
- ⑪『三国志』卷4・魏書・三少帝紀4(陳留王奐)「(景元)二年(261年)秋七月、樂浪外夷韓、貊各率其屬來朝貢」

樂浪・帶方2郡が魏の支配に収まるや東夷の諸族は魏に「屈服」した姿勢を取った。246年に魏が幽州刺史の毋丘儉を派遣して高句麗を攻撃したが、『三国史記』高句麗本紀によれば、この時、高句麗の都の丸都城は陥落し、王は南沃沮の地に逃避している。

この高句麗の大敗北は敗北に止まらず、人の移動を南方に進めたであろうし、このことは埋蔵文物に投影されている。

一方、韓と倭が盛んに楽浪・帯方の2郡へ通貢し、さらには魏の都の洛陽にも通交することになる。

これより先の239年には倭の大夫難升米らが帯方郡に至り、さらには洛陽にまで送られ、翌年には魏の使者を倭国は迎えて金印紫綬等を得ており、243年には大夫伊聲耆、掖邪狗等八人が魏に使っていた。

魏の高句麗攻撃の翌年の247年には、倭国王卑弥呼は倭の狗奴国王と攻撃し合う様を帯方郡に訴えて、魏からは参謀にも当たる塞曹椽史の張政を迎えたほどであるが、この列島の戦争も魏の東方遠征と高句麗の敗北と半島地域の動向に対応した列島地域の権力集中の一過程での戦争であろう。

こうした僻遠の倭国王が魏の帯方郡へ通交し、かつ洛陽にも至って「金印紫綬」等を賜った背景には中国本土では魏が南の呉と対立しており、呉を牽制し得る地理に倭国があるとの認識から、倭国を高く評価したこともあろう(金子1998)。また、倭国が帯方郡へ盛んに通交できた背景には、楽浪・帯方の2郡が魏に接收されるや魏から「邑君」「邑長」の印綬を賜った韓族社会の氏族長たる「臣智」層が既に魏に臣従しており、その立場から倭国使を帯方郡や洛陽に嚮導する働きがあったものと考えられる。晋王朝が魏に替わった翌年の266年に倭国使が「重訳」して入貢できたことはその一例である。

この韓と倭が盛んに帯方郡や楽浪郡に通交する関係は265年には司馬炎が魏に替わって晋を開いた後にも継続する。

【AD3世紀後半】

①『晋書』卷3・武帝「泰始二年(266)十一月己卯、倭人来献方物」

〔『晋書』卷97・東夷・倭人伝「泰始初、遣使重譯入貢」〕

〔「晋起居注云、武帝泰初二年十月、倭女王遣重譯貢獻」(『日本書紀』卷9・神功皇后摂政66年)〕

②『晋書』卷3・武帝「咸寧二年(276)二月、東夷八国帰化。七月、東夷十七国内附」

・同「咸寧三年(277)、是歳、西北雜虜及鮮卑、匈奴、五溪蛮、東夷三国、前後千余輩、各帥種人部落内附」

③『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「咸寧三年(277)、(馬韓)復来」

・『晋書』卷3・武帝「咸寧四年(278)三月、東夷六国来献。是歳、東夷九国内附」

④『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「咸寧四年(278)、(馬韓)請内附」

・『晋書』卷3・武帝「太康元年(280)六月甲申、東夷十国帰化。七月、東夷二十国朝献」

〔280年、晋が呉を滅ぼす〕

⑤『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「武帝太康元年(280)・二年(281)、其主頻遣使入貢方物。七年(286)、八年、十年(289)、又頻至」

⑥同東夷・辰韓伝「武帝太康元年(280)、其王遣使献方物」

・『晋書』卷3・武帝「太康二年(281)三月、東夷五国朝献。夏六月、東夷五国内附」

⑦『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「太康二年(281)、其主遣使入貢方物」

⑧同東夷・辰韓伝「太康二年(281)、(辰韓)復来朝貢」

〔『晋書』卷3・武帝「太康三年(282)九月東夷二十九国帰化、献其方物」〕

⑨〔『晋書』卷36・張華伝「乃出張華為持節都督幽州諸軍事領護烏桓校尉安北將軍、撫納新旧、戎夏

懐之。東夷馬韓新彌諸国、依山帶海、去州四千余里、歴世未附者二十余国、竝遣使朝献、於是遠夷賓服、四境無虞、頻歲豊稔、士馬彊盛。朝議欲徵華入相、又欲進号儀同」]

⑩『晋書』卷3・武帝「太康七年(286)八月東夷十一国内附。是歳、馬韓等十一國遣使来献」

⑪『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「太康七年(286)、(馬韓)至」

⑫同東夷・辰韓伝「太康七年(286)、(辰韓)又来」

・『晋書』卷3・武帝「太康八年(287)八月東夷二国内附」

⑬『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「太康八年(287)、(馬韓)至」

・『晋書』卷3・武帝「太康九年(288)九月東夷七国、詣校尉内附」

・同「太康十年(289)五月鮮卑慕容廆来降、東夷十一国内附。是歳、東夷絶遠三十余国、西南夷二十余国来献」

⑭『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「太康十年(289)、(馬韓)至」

・『晋書』卷3・武帝「太熙元年(290)二月辛丑、東夷七国朝貢」

⑮『晋書』卷97・東夷・馬韓伝「太熙元年(290)、(馬韓)詣東夷校尉何龕上献」

・『晋書』卷4・惠帝「(元康元年)是歳(291)東夷十七国、南夷二十四部、竝詣校尉内附」

3世紀後半の韓の諸国と倭が2郡や洛陽に通交する動向を伝える『晋書』は、646年に唐の房玄齡等が太宗皇帝の勅を奉じて編纂した正史である。当該の時代から300年程後の編纂ではあるが、今は逸書の各種の『晋書』をもとに編修されたから、その東夷伝は簡略に過ぎるとは言え、通交の傾向は伝えていよう。

「東夷」の複数国が西晋へ通交したことは「東夷六国来献」などと統計的に記録されている。そのなかには「東夷馬韓新彌諸国」のように『三国志』韓伝に名の見えない馬韓の「新彌国」が見える。馬韓と辰韓の中から小国が盛んに通交する背景には、幽州都督の張華が東夷に向けた慰撫策が奏功しているが、これに反応して韓内部の各小国では政治社会の変化が胎動していたことが窺える。

ここに倭国が西晋に通交した記事は266年の「重譚」による貢献の例のほかには見えないが、倭国が西晋へ通交したことはこの1度だけとは断言できないであろう。馬韓諸国の嚮導によって入貢が可能であったことは「重譚」の語が暗示しており、「東夷」の十数国の通交のなかには倭国を構成する地域内の一勢力も含まれていたことは十分に考えられる。

前代の倭が馬韓の「臣智」層の嚮導を得て帯方郡へ通交していたと考えられたから、その関係が途絶したことは考えられない。

(2) 韓国文献から見る日韓交流

2～3世紀の半島と列島地域の交流について、これを文献から考察するには韓国史では現存する最古の編纂歴史書の『三国史記』が対象となる。この史書にも、2～3世紀に相当する時代の列島地域の政治社会体は「倭」「倭人」と記録される。その具体的記録は下記であるが、倭、倭人が新羅と関係したことが記録されているが、その関係は新羅と他の勢力との関係と連動している背景が読み取れることから、その記録も下記に並べる。

【AD2世紀】

- ①『三国史記』卷1・新羅本紀「(婆娑尼師今)二十六年(AD105年)春正月。百濟遣使請和」
- ②同「婆娑尼師今二十七年(AD106年)秋八月。命馬頭城主伐加耶」
- ③同「婆娑尼師今二十九年(AD108年)夏五月。遣兵伐比只国多伐国草八国并之」
- ④同「祇摩尼師今四年(AD115年)春二月。加耶寇南辺。秋七月。親征加耶。帥歩騎、度黄山河。加耶人伏兵林薄、以待之。王不覺直前。伏發圍數重。王揮軍奮擊。決圍而退」
- ⑤同「祇摩尼師今五年(AD116年)秋八月。遣將侵加耶。王帥精兵一萬以繼之。加耶嬰城固守。会久雨乃還」
- ⑥同「祇摩尼師今十年(AD121年)夏四月。倭人侵東辺」
- ⑦同「祇摩尼師今十一年(AD122年)夏四月。大風東來。折木飛瓦。至夕而止。都人訛言。倭兵大來。争遁山谷。王命伊滄翌宗等諭止之」
- ⑧同「祇摩尼師今十二年(AD123年)春三月。與倭国講和」
- ⑨同「祇摩尼師今十四年(AD125年)春正月。靺鞨大入北境。殺掠吏民。秋七月。又襲大嶺柵。過於泥河。王移書百濟請救。百濟遣五將軍助之。賊聞而退」
- ⑩同「逸聖尼師今四年(AD137年)春二月。靺鞨入塞。燒長嶺五柵」
- ⑪同「逸聖尼師今六年(AD139年)八月。靺鞨襲長嶺。虜掠民口。冬十月。又來。雷甚。乃退」
- ⑫同「逸聖尼師今七年(AD140年)春二月。立柵長嶺。以防靺鞨」
- ⑬同「逸聖尼師今九年(AD142年)秋七月。召羣公議征靺鞨。伊滄雄宣上言不可。乃止」
- ⑭同「逸聖尼師今十三年(AD146年)冬十月。押督叛。發兵討平之。徙其餘衆於南地」
- ⑮『三国史記』卷2・新羅本紀「(阿達羅尼師今)五年(AD158年)春三月。倭人來聘」
- ⑯同「阿達羅尼師今十二年(AD165年)冬十月。阿滄吉宣謀叛、發覺。懼誅亡入百濟。王移書求之。百濟不許。王怒出師伐之。百濟嬰城守不出。我軍糧盡乃歸」
- ⑰同「阿達羅尼師今十四年(AD167年)秋七月。百濟襲破国西二城。虜獲民口一千而去。八月。命一吉滄興宣。領兵二萬伐之。王又率騎八千。自漢水臨之。百濟大懼。還其所掠男女乞和」
- ⑱同「阿達羅尼師今十七年(AD170年)冬十月。百濟寇辺」
- ⑲同「阿達羅尼師今二十年(AD173年)夏五月。倭女王卑彌呼遣使來聘」
- ⑳同「伐休尼師今五年(AD188年)春二月。百濟來攻母山城。命波珍滄仇道。出兵拒之」
- ㉑「伐休尼師今六年(AD189年)秋七月。仇道與百濟戰於狗壤。勝之。殺獲五百餘級」
- ㉒同「伐休尼師今七年(AD190年)秋八月。百濟襲西境圓山郷。又進圍缶谷城。仇道率勁騎五百擊之。百濟兵佯走。仇道追及蛙山。為百濟所敗。王以仇道失策。貶為缶谷城主。以薛支為左軍主」
- ㉓同「伐休尼師今十年(AD193年)六月。倭人大饑。來求食者千餘人」
- ㉔同「奈解尼師今四年(AD199年)秋七月。百濟侵境」

【AD3世紀】

- ①『三国史記』卷2・新羅本紀「(奈解尼師今)十三年(AD208年)夏四月。倭人犯境。遣伊伐滄利音。

将兵拒之」

- ②同「助賁尼師今三年(232)夏四月。倭人猝至围金城。王親出戰。賊潰走。遣輕騎追擊之。殺獲一千餘級。
- ③同「助賁尼師今四年(233)五月。倭兵倭東辺。秋七月。伊飡于老與倭人戰沙道、乘風縱火焚舟、賊赴水死盡」
- ④同「沾解尼師今三年(249)夏四月。倭人殺舒弗邯于老」
- ⑤同「儒禮尼師今四年(287)夏四月。倭人襲一禮部、縱火燒之、虜人一千而去」
- ⑥同「儒禮尼師今六年(289)夏五月。聞倭兵至、理舟楫繕甲兵」
- ⑦同「儒禮尼師今九年(292)夏六月。倭兵攻陷沙道城、命一吉飡大谷領兵救、完之」
- ⑧同「儒禮尼師今十一年(294)夏。倭兵來攻長峯城、不克」
- ⑨同「儒禮尼師今十二年(295)春。王謂臣下曰、倭人屢犯我城邑、百姓不得安居、吾欲與百濟謀、一時浮海、入擊其国、如何。舒弗邯弘權對曰、吾人不習水戰、冒險遠征、恐有不測之危、況百濟多詐、常有吞噬我国之心、亦恐難與同謀、王曰、善」
- ⑩同「基臨尼師今三年(300)春正月。與倭国交聘」

2世紀に比べると、3世紀には倭に関する記事は増している。「倭女王卑彌呼」が新羅に「遣使し來聘」したと「阿達羅尼師今二十年(AD173年)夏五月」に『三国史記』で編年したことは『三国志』魏志・倭人伝の記事を半世紀ほど遡及させた編年の誤りであるが、このことは「新羅本紀」の倭、倭人記事には『三国志』編纂の歴史観が反映されていることを現している。「倭女王卑彌呼」が新羅に「遣使し來聘」したとは、新羅が既に辰韓十二国を統合して新羅国に成長し、かつ「倭」国とは「聘」交する対等の外交を進めたと編纂したその背景には「倭女王卑彌呼」が魏の皇帝から「親魏倭王」に冊封されていたが、新羅は未だ新羅国としては成立していないながらも、「倭女王卑彌呼」との「聘」交関係を2世紀半ばに仮定することで新羅国の東アジアの国際関係のなかに承認されたとの表現であろう。

しかし、3世紀の倭、倭人が新羅を侵したとの一連する「新羅本紀」の記事はいかに理解されるのだろうか。早く津田左右吉氏は「新羅本紀」の倭関係記事は「史料として価値の無いものである」(津田1966)と切り捨てたが、近30年はむしろこれらの記事を肯定的に解釈する方向にある。

旗田巍氏は倭が新羅に侵入する季節の偏りに注目して、倭を4、5、6月に集中して新羅の人と物を掠奪する「季節的海賊集団」と見た(旗田1973)。即ち、ヤマト政権など列島の王権が発動した侵入とは理解していない。

「新羅本紀」に見られた倭の新羅侵入記事は侵入を被った側の記録であり、侵入を発動する主体とその所在地等の記録は薄弱とならざるを得ない。それ故に、「新羅本紀」の倭関係記事からのみでは新羅に侵入する倭の勢力範囲の記事の傾向から海賊とのみ規定することは必ずしも正当ではない。また、その発源地を加羅にあるとか(井上1978)、また北部九州であるとか、はたまた、百濟系や新羅系の倭国と読み解く説(金1969)も隣接史料と考古学的見地との整合的考察がもとめられる(田中1982)。

〔参考文献〕

- 池田温1998「東洋学からみた『魏志』倭人伝」平野邦雄編『古代を考える邪馬台国』吉川弘文館
- 池田温2002『東アジア文化交流史』吉川弘文館
- 井上秀雄1978『『日本書紀』の新羅伝説記事』井上秀雄『任那日本府と倭』東出版寧楽社
- 井上秀雄1991「中国史書にみえる倭」「朝鮮史書にみえる倭」井上秀雄『倭・倭人・倭国—東アジア古代史再検討—』人文書院
- 金子修一1998「二・三世紀の東アジア世界」平野邦雄編『古代を考える邪馬台国』吉川弘文館
- 金錫亨1969『古代朝日関係史—大和政権と任那—』後編第5章第1節「朝鮮史料からみた五世紀までの朝日関係」勁草書房
- 高寛敏1996『『三国史記』の原典的研究』（「第二章新羅本紀の国内原典」雄山閣出版）
- 鈴木英夫1996『『三国史記』の倭関係記事』同『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店、初出は『東アジアの古代文化』44号、1985年
- 西嶋定生1983『中国古代国家と東アジア世界』東大出版会／第3章・親魏倭王冊封に至る東アジアの情勢—公孫氏政権の興亡を中心として—
- 西嶋定生1985『日本歴史の国際環境』東大出版会／序章・倭国の形成とその国際的契機／第一章・一～三世紀の東アジアと倭国／第二章・四～六世紀の東アジアと倭国
- 武田幸男1990「魏志東夷伝における馬韓」『馬韓・百濟文化』第12号、韓国・円光大学校
- 李賢恵1994「三韓의 對外交易體系」李基白先生古稀紀念『韓國史學論叢』上、一潮閣。邦訳は金井塚良一訳「三韓の對外交易体系」『東洋研究』第119号
- 武田幸男1995～1996「三韓社会における辰王と臣智」（上・下）『朝鮮文化研究』第2、3号
- 田中俊明1982『『三国史記』にみえる「倭」関係記事について』（『歴史公論』第8巻第4号、雄山閣
- 津田左右吉1966「三国史記の新羅本紀について」『古事記及び日本書紀の新研究』津田左右吉全集別巻第一、岩波書店
- 旗田巍1973『『三国史記』新羅本紀の「倭」』『日本のなかの朝鮮文化』19号
- 李成市1998「第一編楽浪郡設置と高句麗の国家形成」『古代東アジアの民族と国家』岩波書店
- 木村誠1998「倭人の登場と東アジア」平野邦雄編『古代を考える邪馬台国』吉川弘文館
- 西嶋定生1999『倭国の出現—東アジア世界のなかの日本—』東大出版会
- 大庭脩2001『親魏倭王』学生社、増補初版
- 堀敏一2006「漢代の異民族支配における郡県と冊封」同『東アジア世界の形成—中国と周辺国家—』汲古書店
- 堀敏一2006「異民族支配からみた三国時代の位置」同『東アジア世界の形成—中国と周辺国家—』汲古書院